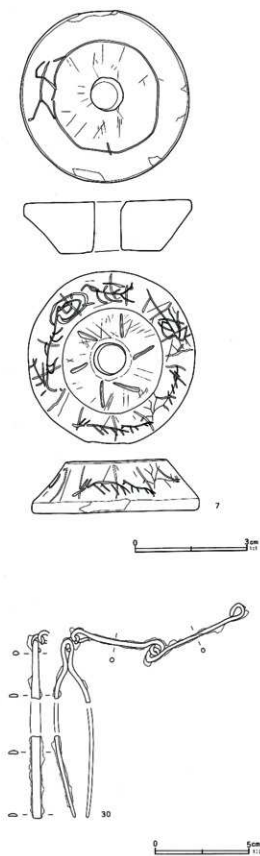
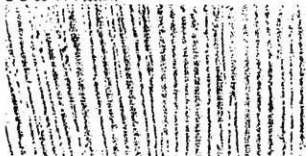


第69図 第58号墳出土遺物(2)



第70図 第58号墳埴輪ハケ拓影

SS 58 A 1類(10)



SS 58 A 2類(9)



SS 58 A 3類(8)



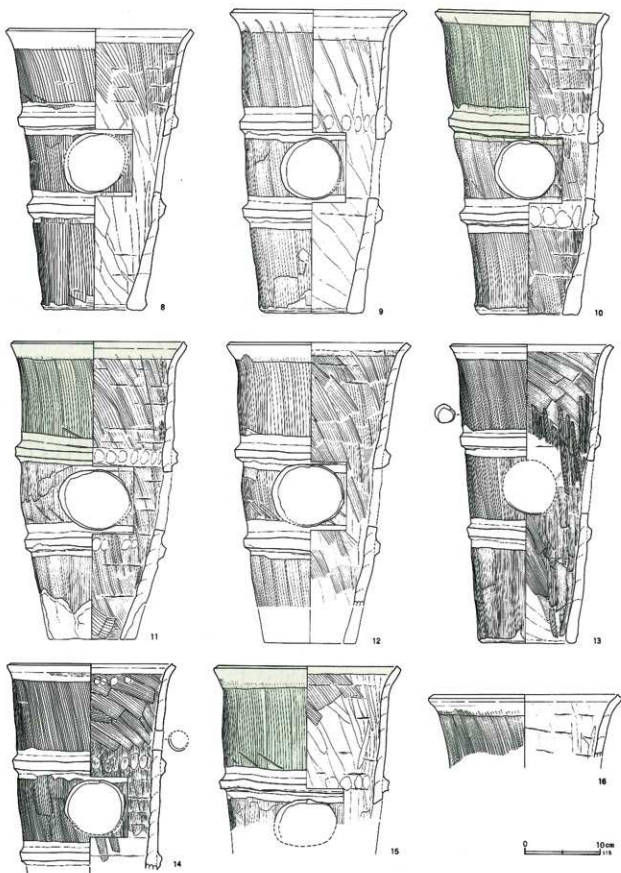
SS 58 B類(13)



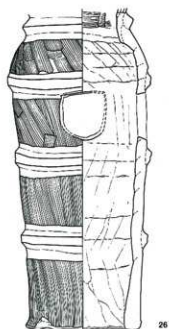
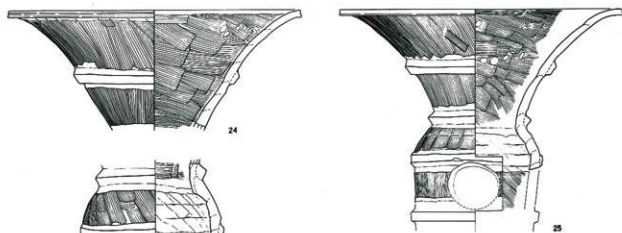
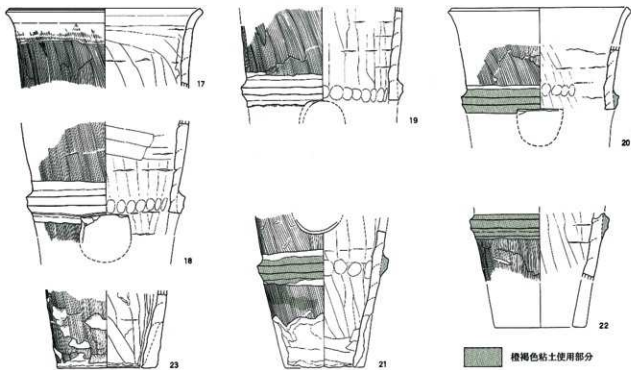
SS 58 C類(18)



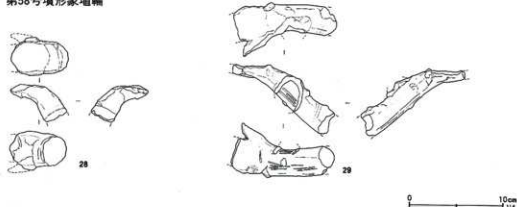
第71图 第58号壤円筒埴輪(1)



第72図 第58号墳円筒埴輪(2)



第73図 第58号墳形象埴輪



剥落痕が認められるが詳細は不明である。

築造時期は、周溝覆土の中層にFAブロック及びF  
A粒子混入土が堆積していたことから、築造後周溝が

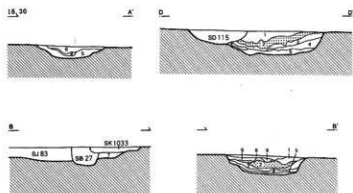
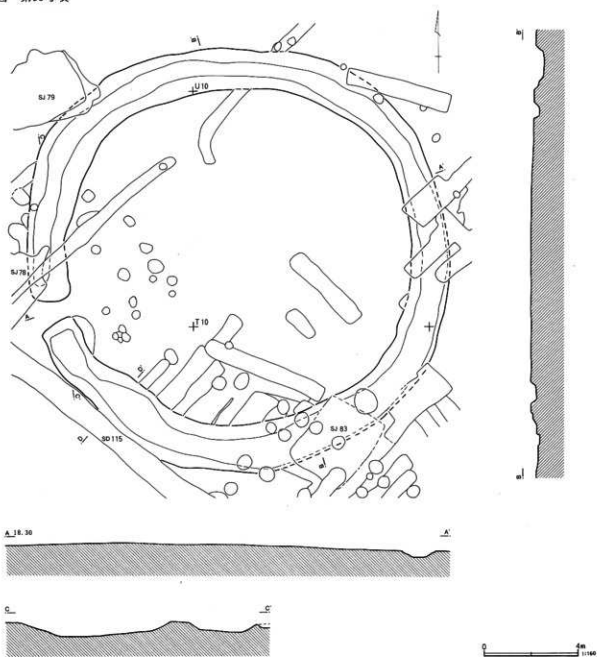
少し埋まり始めた段階にFAの降下があったことを示  
唆している。また出土した土器や埴輪の特徴から5世  
紀後葉から末葉に築造されたものと推定される。

第58号墳出土遺物観察表 (第68・69図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.0	5.6		BEF	A	赤褐色	100	体部外面黒斑
2	坏	(12.8)	(5.8)		DEF	A	赤褐色	30	口縁部やや内湾
3	甕	18.2	28.8	7.5	ABEFJ	A	淡褐色	70	胴部下半黒斑 木口状のハケメ
4	甕	17.0	30.8	6.0	AEFIJ	A	淡褐色	80	胴部上半黒斑 器面風化
5	甕				BDGJ	A	黒褐色		外面縦格子印目後ナデ 内面ナデ消し
6	刀子	遺存長3.65、身幅1.3、背幅0.3cm、重量4.10g							
7	紡師車	広径4.5×狭径2.7×孔径0.8×厚さ1.3cm、重量42.38g							
30	鉄製品	復元長9.5cm、重量6.29g							

第58号墳出土埴輪観察表 (第71~73図)

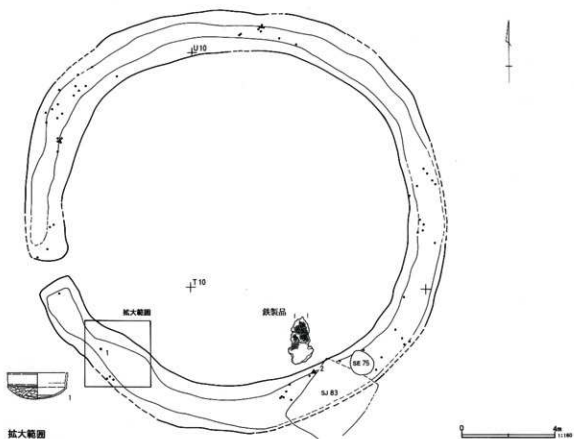
番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
8	円筒 A3類	EFGJ	B	E	70	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	基部外面木目圧痕 底面縦圧痕
9	円筒 A2類	EFGJ	B	E	90	縦ハケ	6	右傾斜ハケ	7	基部内面掌紋圧痕
10	円筒 A1類	EFGJ	B	E	95	縦ハケ	7	右傾斜ハケ	7	基部外面木目圧痕・内面掌紋圧痕
11	円筒 A1類	EFGJ	B	E	90	縦ハケ	6	右傾斜ハケ	6	赤彩 内面粘土紐痕明瞭
12	円筒 A1類	DEFJ	B	E	80	縦ハケ	6	右傾斜ハケ	6	橙褐色粘土付着 赤彩残存
13	円筒 B類	EFGJ	B	E	45	縦ハケ	11	縦・右傾斜ハケ	12	副次孔あり 基部内外面ナデ
14	円筒 B類	EFGJ	B	E	45	縦ハケ	12	縦・右傾斜ハケ	10	副次孔あり
15	円筒 A1類	AFJL	B	E	90	縦ハケ	7	右傾斜ハケ	7	橙褐色粘土付着
16	円筒 A2類	ACFJ	B	E	40	縦ハケ	7	指ナデ		白色針状物混入
17	円筒 C類	AEFJ	B	E	45	縦ハケ	13	ナデ		赤彩残存
18	円筒 C類	AEFJ	B	E	35	縦ハケ	11	ナデ		半円形透孔
19	円筒 C類	AEFJK	B	E	50	右傾斜ハケ	13	指ナデ		凸帯橙褐色粘土付着
20	円筒 C類	ABFJ	B	E	20	右傾斜ハケ	12	指ナデ		半円形透孔 凸帯橙褐色粘土使用
21	円筒 C類	AFJL	B	E	60	縦ハケ	12	指ナデ		凸帯橙褐色粘土使用
22	円筒 C類	AFGJ	B	E	30	縦ハケ	12	指ナデ		凸帯橙褐色粘土使用
23	円筒 D類	ADGJ	A	F	45	縦ハケ	12	指ナデ		底面木葉痕 須惠質
24	朝顔 B類	AFGJ	A	E	80	縦ハケ	12	横ハケ	10	赤彩残存
25	朝顔 B類	EFGJ	B	E	45	縦ハケ	14	右傾斜ハケ	14	赤彩残存
26	朝顔 C類	ADEFJ	B	E	70	縦ハケ	14	ナデ		半円形透孔 底面赤色粒子付着
27	円筒 D類	ABEFJ	A	E		縦ハケ	12	縦ハケ	12	凸帯下沈線あり 内面須惠質
28	形象 人物	AEFJ	B	E		ナデ				右手部分 一部赤彩 29と同一
29	形象 人物	AEFJ	B	E		粗いハケメ・ナデ				左手部分 一部赤彩 28と同一



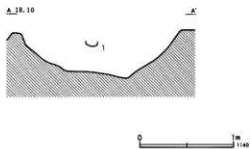
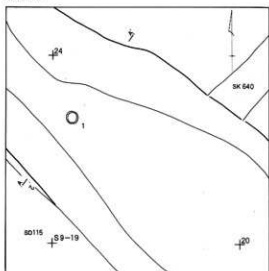
SS 59

- |   |       |                      |
|---|-------|----------------------|
| 1 | 黒褐色土  | ローム粒子少量含む。           |
| 2 | 暗褐色土  | ローム粒子、FA粒子少量含む。      |
| 3 | 暗褐色土  | ローム粒子多量含む。           |
| 4 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。   |
| 6 | 黒褐色土  | ローム粒子、灰褐色ブロック少量含む。   |
| 7 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 8 | 灰褐色土  | 炭酸A粒子少量含む。           |
| 9 | 暗褐色土  | ロームブロック、黒褐色ブロック少量含む。 |

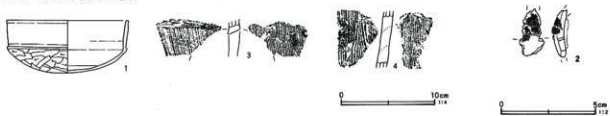
第75図 第59号墳遺物分布図



拡大範囲



第76図 第59号墳出土遺物



#### 第59号墳 (第74～76図)

調査区の中央やや西寄り、S・T-9-11、U-9-10グリッドに位置している。周囲には南東に第58号墳、東に第60号墳がそれぞれ隣接する。南西を向くブリッジをもった中規模の円墳で、墳径14.6×14.1m、周溝径17.8mを測る。墳丘部分には中・近世の井戸、溝、土塀等の多数の遺構が重複し、周溝部分にはS J 78・79・83が重複していた。

墳丘部の平面形態は、ブリッジ付近の南西側で若干歪んでいるが比較形的に整った円形で、周溝幅2.2～1.4m、深さ0.5～0.25mを測る。周溝の断面形は逆台形で全体に掘り込みが浅く、底面は平坦である。ブリッジはハの字に大きく開き、主軸方向はN-106-Wを示す。

周溝覆土は大きく5層に区分される。最下層にロー

ムブロックを多量に含む暗黄褐色土(5層)が堆積し、その上に墳丘流入土と推定される3・4層が堆積する。覆土上層の2層にはFA粒子が含まれており、FA降下以前の築造であることが判明した。

遺物は、ブリッジ右側の少し離れた位置から土師器杯1点が出土した。周溝底面から約30cm浮いた状態で、口縁を上にして置かれていた。

ほかに周溝南側から不明鉄製品が1点出土している。欠損部分が多く本来の形状は不明であるが、鈎金具と思われるもので、表面に布が付着していた。また円筒埴輪の破片が少量出土しているが、周辺の古墳からの流れ込みであろう。

築造時期については周溝覆土上層にFA粒子が確認されたことから、FA降下以前の築造であることが判明した。

第59号墳出土遺物観察表 (第76図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	杯	13.0	5.6		DEFJ	A	橙褐色	100	口唇部面取り 角閃石粒多量混入	
2	鉄製品	遺存長2.5cm、重量2.92g								鈎金具か 外面布付着

第59号墳出土埴輪観察表 (第76図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
3	円筒	E F J	C	E		縦ハケ	13	縦ハケ	10	SS58出土埴輪に類似
4	円筒	E F J	C	E		縦ハケ	9-10	縦ハケ	11	SS58出土埴輪に類似

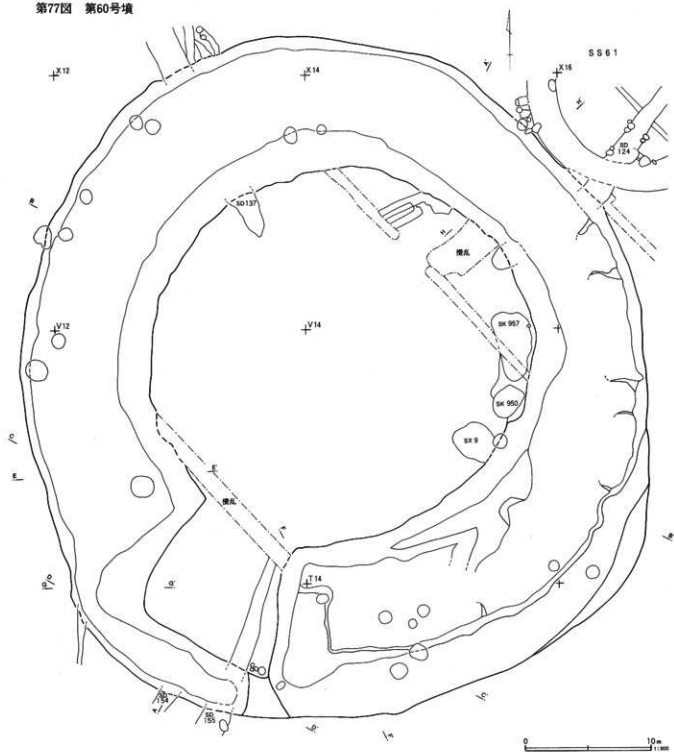
#### 第60号墳 (第77～130図)

調査区中央のS-X-12～16グリッドを中心に位置し、地形的には上位段丘面から低位面に移行する緩斜面部に立地する。周囲には北東に第61号墳、南西に第59号墳、前方部の正面に第58号墳、南東に第46号墳がそれぞれ隣接している。

このうち第61号墳とは周溝の一部が接し、確認面において重複関係が認められた。しかし、周溝の調査時の所見によれば、第60号墳の周溝上端を第61号墳が削平している状況が確認されたものの、土層断面の観察では明確な先後関係を把握することはできなかった。ただ、周溝の位置関係からすれば、第61号墳が第60号墳の存在を意識した配置にあることは明らかである。

本墳は南西方向に面した小規模な前方部をもった帆立貝形前方後円墳である。規模は墳丘長42.5m、後円部径33.0m、前方部長9.5m、同幅16.5mを測り、前方部長は後円部径の1/4以上を占める。墳丘部の主軸方位はN-152'-Wを示す。周溝の平面形態は墳丘の相似形とならず、円形に近い平面形態で、周溝径は東西53.0m×南北54.0mを測る。墳丘は調査時には農事試験場の造成に伴い鏝置状に削平され旧状を大きく変えていた。しかし、墳丘部分にはSD124・137・155等の溝や土塀がわずかに重複しているだけであることから、近世段階までかなりの規模の墳丘が残っていたために、開発の手が及ばなかったものと想像される。なお、前方部を南西に向けた主軸方位は、埼玉古墳群の

第77図 第60号墳



諸古墳に共通しており注目される。

次に墳丘各部の状況について説明する。後円部は比較的形の整った円形で、南東側の墳丘裾部に造り出様の張り出し部をもつ。これは造り出部のような整然とした規格性はみられず、地山を不整形に掘り残して、

周溝内に至るスロープを形成したものである。この部分は周溝の中では最も深く掘り込まれた部分であることから周溝掘削時の作業用通路としての機能等が想定されるが、その性格については不明な部分が多く断定はできない。

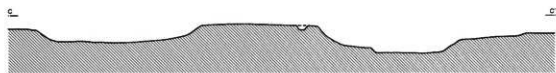




主軸断面 (南北方向)



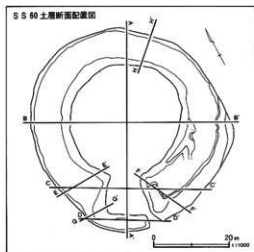
後門部断面 (東西方向)



前方部断面 (東西方向)



前方部南側周溝断面



西側括れ部断面



東側括れ部断面

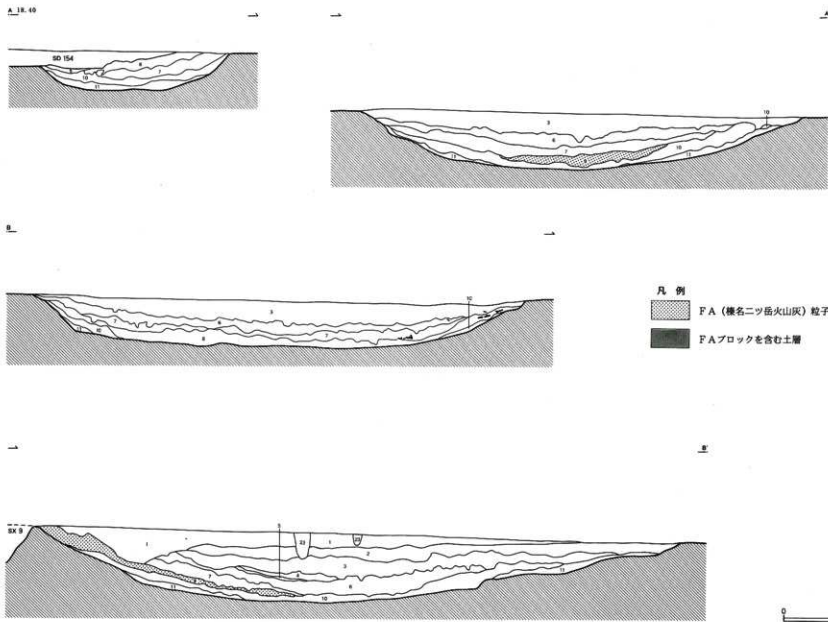


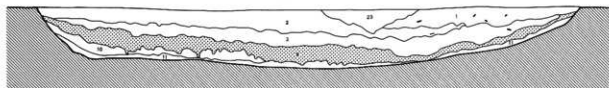
前方部西側コーナー断面



北側周溝断面 (SS 61 重複部分)

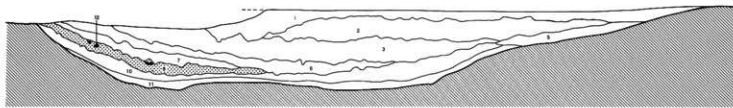






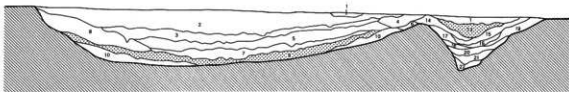
E

F



F

G



G

H



H

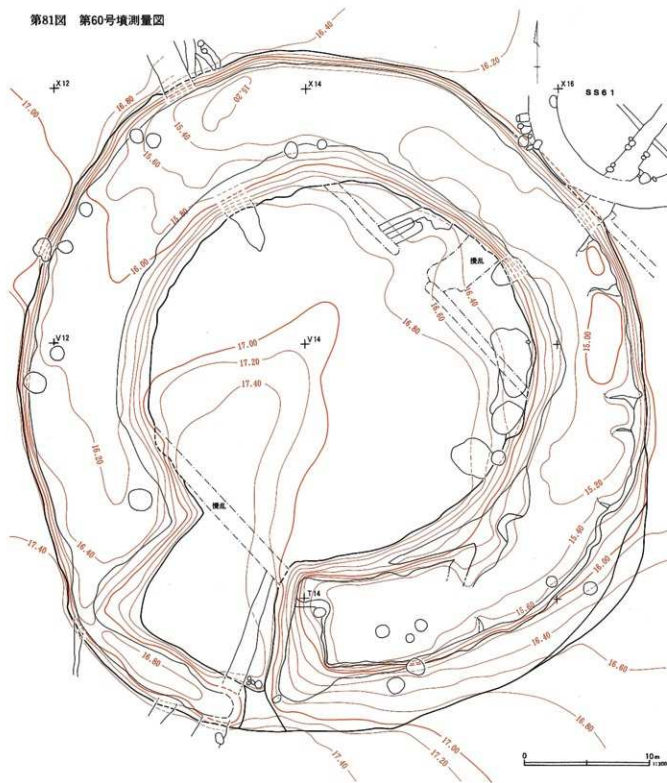
I



## SS60

- |         |                        |
|---------|------------------------|
| 1 暗褐色土  | ローム粒子微量含む。             |
| 2 暗褐色土  | ローム粒子少量含む。             |
| 3 黒褐色土  | 浅間B粒子、ローム粒子微量含む。       |
| 4 黒褐色土  | 浅間B粒子、ロームブロック多量含む。     |
| 5 暗褐色土  | 浅間B粒子、ロームブロック少量含む。     |
| 6 黄褐色土  | 黒褐色ブロック少量含む。           |
| 7 黒褐色土  | ロームブロック少量含む。           |
| 8 暗褐色土  | ローム粒子多量含む。             |
| 9 褐色土   | ローム粒子、FA粒子多量含む。        |
| 10 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。粘性あり。        |
| 11 黒褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。     |
| 12 灰褐色土 | FAブロック多量含む。            |
| 13 黒褐色土 | ローム粒子、FA粒子少量含む。        |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。粘性あり。        |
| 15 褐色土  | ローム粒子多量含む。             |
| 16 黄褐色土 | ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 17 褐色土  | ロームブロック多量含む。粘性あり。      |
| 18 黄褐色土 | ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 19 黄褐色土 | ロームブロック、褐色粘土ブロック少量含む。  |
| 20 暗褐色土 | 暗褐色ブロック多量、ロームブロック微量含む。 |
| 21 暗褐色土 | 暗褐色ブロック多量含む。粘性あり。      |
| 22 黄褐色土 | ロームブロック少量含む。粘性あり。      |
| 23 明褐色土 | ロームブロック少量含む。           |

第81図 第60号墳測量図

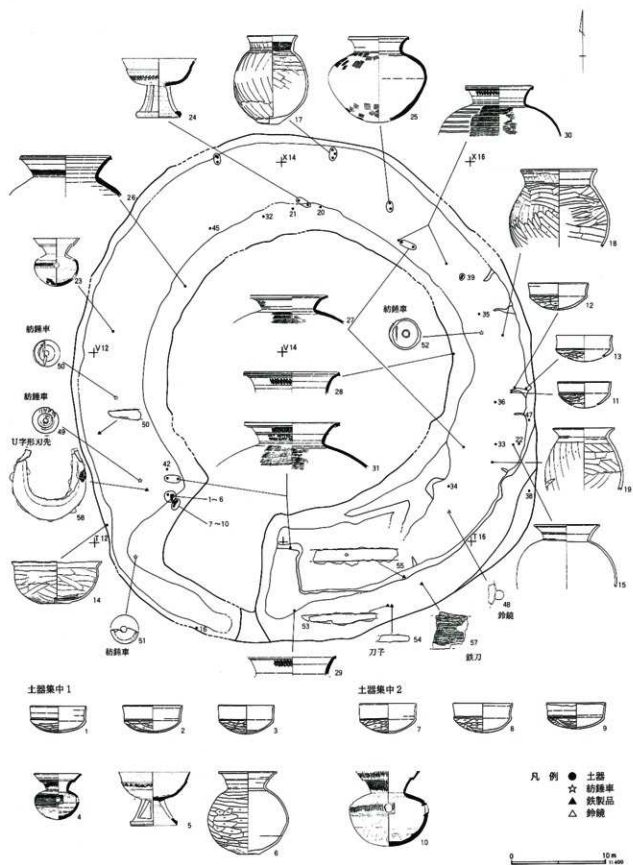


前方部は後部に比べると小規模で、ハの字状に短く開く形態である。前方部前面の周溝は幅を急に狭め、掘り込みも浅くなり、南東側のコーナー部では周溝が途切れてブリッジを設置していた。西側括れ部の墳丘立ち上がりは緩やかで、等高線の間隔も広いが、東側

括れ部は急角度に立ち上がり、見かけのうえで墳丘の高さを意識した造作と想定される。

前述したように周溝の平面形態は円形に近く、「造り出付き円墳」としての認識も可能であるが、当古墳群では最大規模の円墳でも墳丘径20m前後しかなく、墳

第82图 第60号填遺物分布图



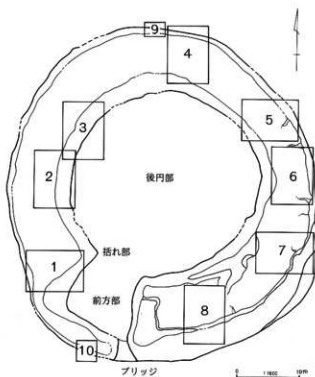
丘規模及び周溝掘削土量の面において隔絶したあり方を示し、盟主墳としての位置づけが妥当であろう。

周溝は全体に幅広く掘削されており、幅10.5~14.2m、深さ0.95~1.7mを測る。周溝底面の等高線によれば西側舌れ部から緩やかに傾斜しながら掘削されており、最も深度の深い東側周溝部分との比高差は1.6mを測る。周溝の底面は概ね平坦であるが、東側から南側にかけて周溝外側の底面に段差部分が数箇所残されていた。これは周溝掘削時における作業単位を反映したものと推定される。周溝の断面形は底面幅の広い逆台形で、周溝外側の立ち上がりは緩やかである。また南側周溝の外側から東側舌れ部にかけては幅広い緩斜面が作り出されていた。

前方部前面の周溝は、幅を狭め浅くなり、断面レンズ形を呈する。周溝幅4.7m、深さ0.8mを測り、前方部南東コーナー部で周溝は途切れ、スロープ状のブリッジが作り出されていた。このような状況から考えると築造当初の前方部の盛土は後円部ほど高くなかったものと考えられる。

周溝覆土は大きく12層に区分される。最下層にはローム粒子・ロームブロックを少量含む黒褐色土の11層が薄く堆積し、その上にローム粒子を少量含む黒褐色土の10層が重なり、さらにFA粒子を多量に含む褐色土の9層が、FAブロック純層の12層をまばらに混入しながら堆積していた。土層の堆積状況は概ね墳丘側からの流れ込みを示し、レンズ状に堆積していた。FAの堆積状況から判断すると、周溝の一部が埋没し始めた段階にFAが降下したものであると思われる。しかし、周溝規模が他の円墳に比べて大きいことから、周溝の埋没速度も遅く、墳丘寄りでは上位にFA混入土層が認められたのに対して、周溝中央部では底面に近い位置に堆積しているのが確認された。埴輪は覆土層の2・3層を中心に出土し、墳丘側から転落した状態のもの以外に、周溝外側からの流入を窺わせるような出土例も確認されている。埴輪を多量に含む2・3層には天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石(As-B)粒子が混入しており、平安時代に外表施設(埴輪等)

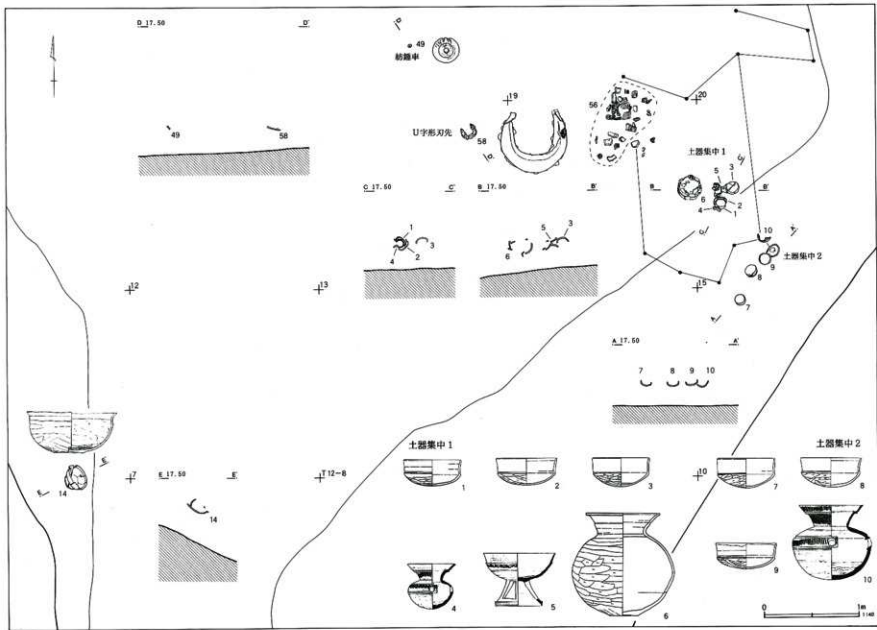
第83図 第60号墳出土状況配置図

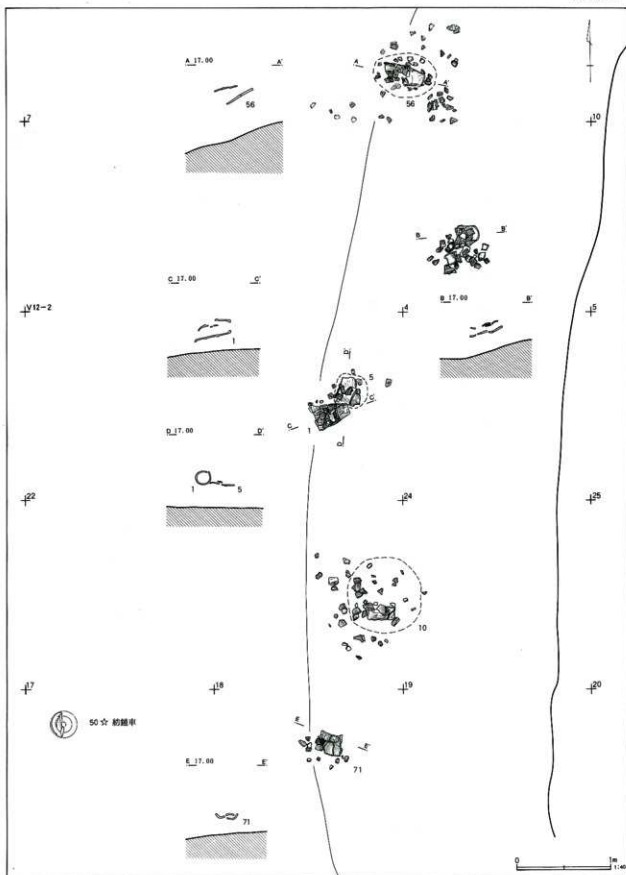


が大規模に倒壊し、周溝内に流入したものと想定される。それを裏づけるように覆土上層からまとまった量の平安時代の土師器、須恵器が出土している。

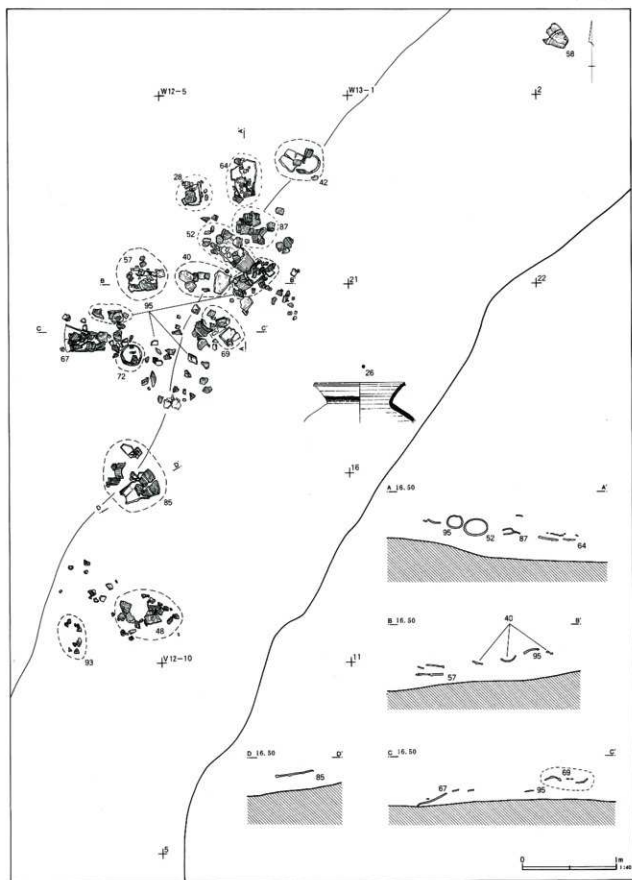
出土した遺物の総量は、コンテナにして200箱を優に越えており、その大半が円筒埴輪の破片によって占められていた。遺物は土師器環9・壺3・鉢1・甕3、須恵器高環2・甕3・甕7・同破片多数、鈴鏡片1、鉄鏡1、鉄刀2、刀子4、鎌1、U字形刃先1、不明鉄製品1、滑石製紡錘車2・陶質紡錘車のほか、多数の円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪等の破片が周溝から出土した。

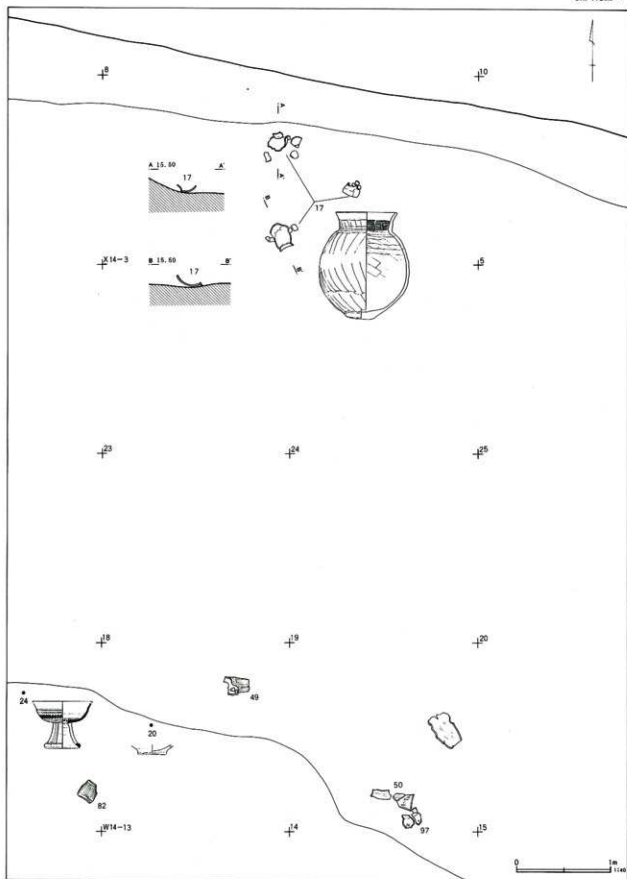
西側舌れ部には土器集中が2箇所認められた。土器集中1は、土師器環3・小型壺1、須恵器壺1・高環1の6個体がまとめて出土した。出土状況は1・2の模倣環と4の壺は入れ子状に、上から4・1・2の順番で重ねて置かれていたようである。それに接して3の模倣環と5の須恵器高環が検出され、3の環は伏せた状態で、5の高環は西側に向かって倒れた状態で出土した。さらに5の西側には6の小型壺が据え置か





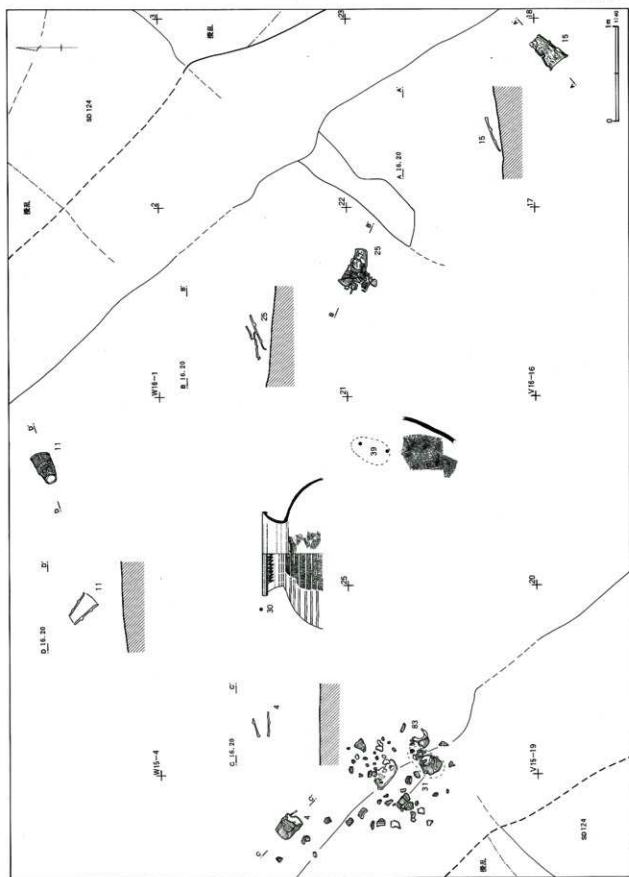


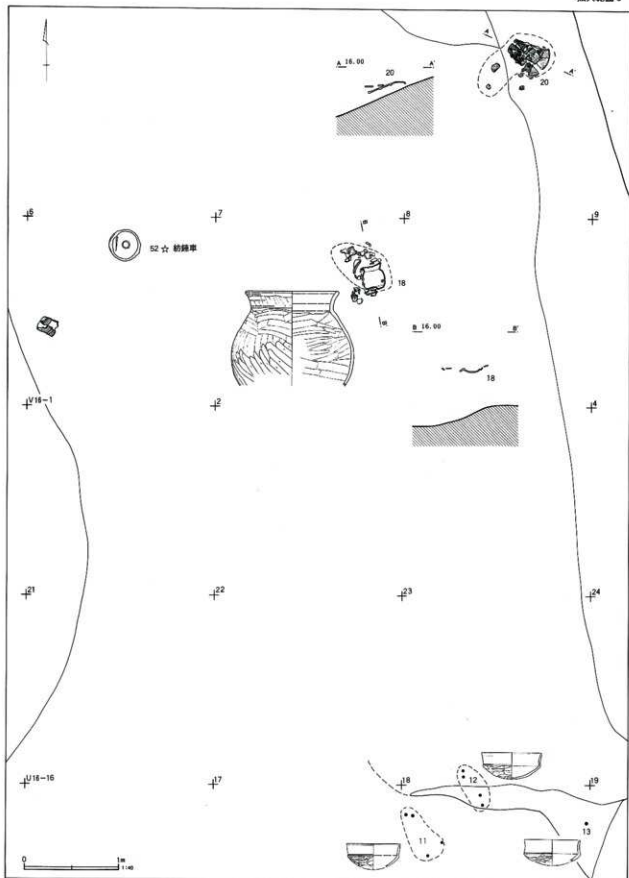




第88図 第60号墳遺物出土状況図(5)

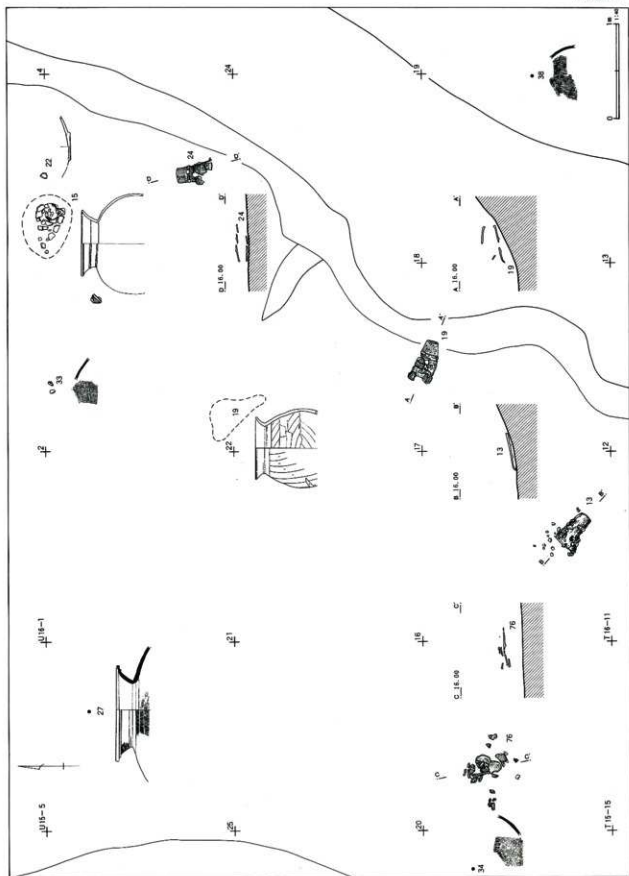
拡大範囲5





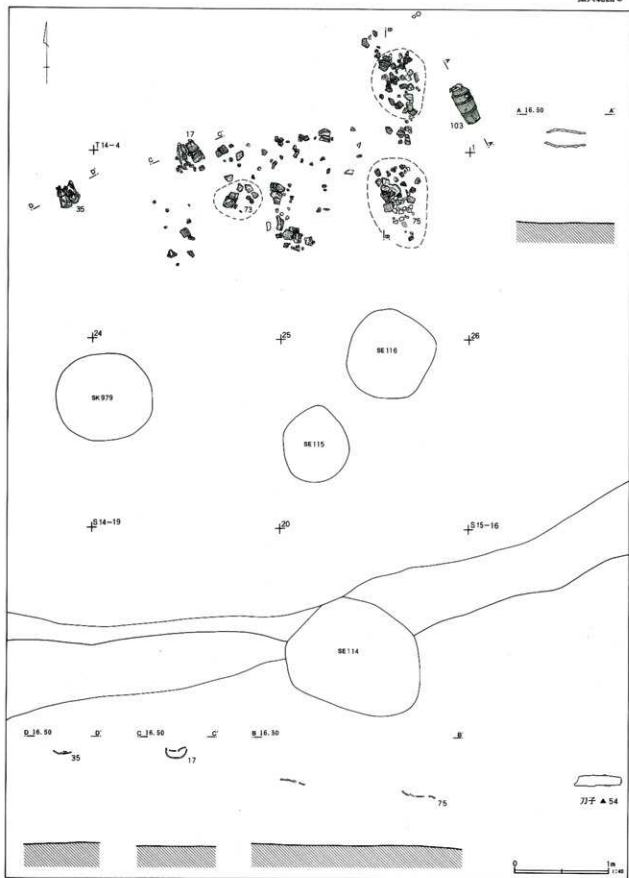
第90図 第60号墳遺物出土状況図(7)

拡大範囲7

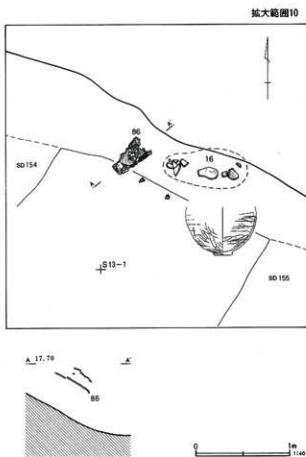
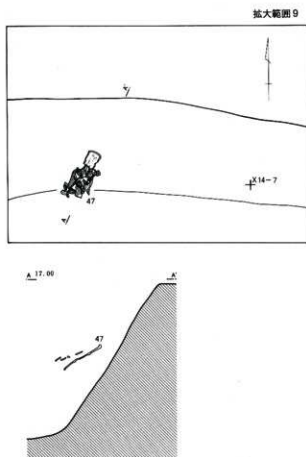


第91图 第60号墳遺物出土状況图(8)

拡大範囲B



第92図 第60号墳遺物出土状況図(9)



れていた。

土器集中2は、土器集中1の南側に隣接して検出された。土師器模倣坏3、須恵器大型甕1からなるセットである。7～9の模倣坏は口縁を上にした状態で南北に一列に配置され、北端の9に接して10の大型甕が置かれていた。坏はいずれも完形で、8・9の体部外面には黒色顔料で十字文(X)が描かれていた。一方、大型甕は破砕された状態で出土し、口縁部と底部以外の破片は周辺にばらまかれていた。なお、出土した土器の特徴からすると土器集中1・2の間にはあまり時期差は認められない。

このほかに周溝の数箇所から完形に近い土師器坏・壺・鉢・甕等が単独で出土している。前方部南西コーナー付近の周溝外側斜面部から土師器鉢(14)が単独で出土した。後円部北側の周溝外側寄りからは内外面に多量の煤が付着した土師器甕(17)が破砕され、

三つほどの塊に分かれて出土した。後円部東側の周溝外側寄りからは11～13の坏、15の壺、18・19の甕が散在した状態で出土している。このうち19の甕は細かく打ち割られていた。前方部側からの土器の出土量は少なく、16の土師器壺の胴部の破片がブリッジ寄りの周溝外側斜面部から流れ込んだ状態で出土したのみである。

須恵器は西側活れ部の土器集中から出土した高坏・甕以外は、いずれも破砕された状態で破片となって出土した。中にはかなり距離の離れた資料が接合した例がみられ、その傾向は須恵器甕に特に顕著に認められた。出土した須恵器の個体数も甕類は確実に10個体以上を数え、他の古墳に比べて突出した出土量を誇っている。

25の甕は焼成が甘く、色調も白っぽく土師器に近い焼き上がりのものである。器肉が非常に厚く、胴部外

第93图 第60号墳出土遺物(1)



1



2



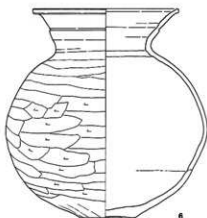
3



4



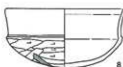
5



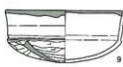
6



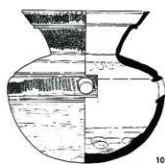
7



8



9



10



11



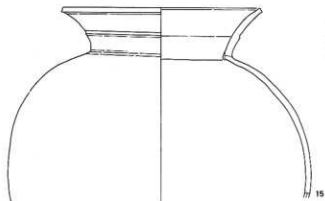
12



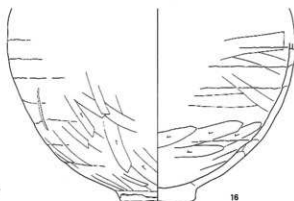
13



14



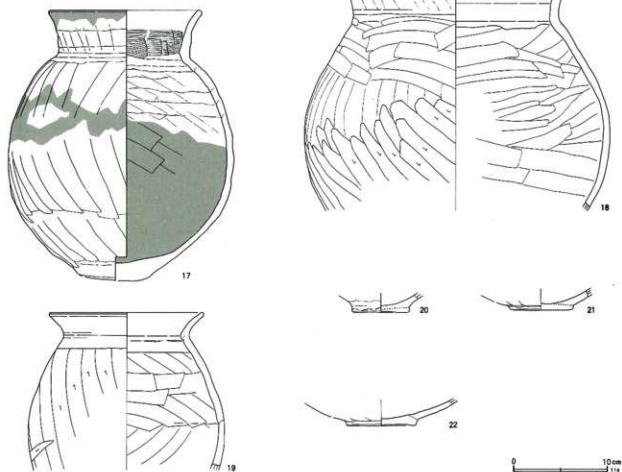
15



16







面に擬格子叩きを一部残しているが、内面には明瞭な当具痕がみられず、成形技法の稚拙さや、焼成、胎土等の特徴から在地産と推定される。他方、26～31の須恵器甕は胎土、焼成、成形技法の特徴から搬入品と推定される優品である。断面がセピア色の31は胎土分析の結果、大阪府陶邑窯跡群産と推定されている。

金属製品は銅鏡片と鉄製品が周溝内から出土した。銅鏡は1個の鈴のみを遺存する小片で、面径は8.0cm程度に復元される。小型鏡に分類されるが、縁だけしか残っていないため内・外区の文様は不明である。縁は平縁で、幅は1.2cm以上、厚さは外側で3mmを測る。後円部南東側の周溝覆土中から出土した。

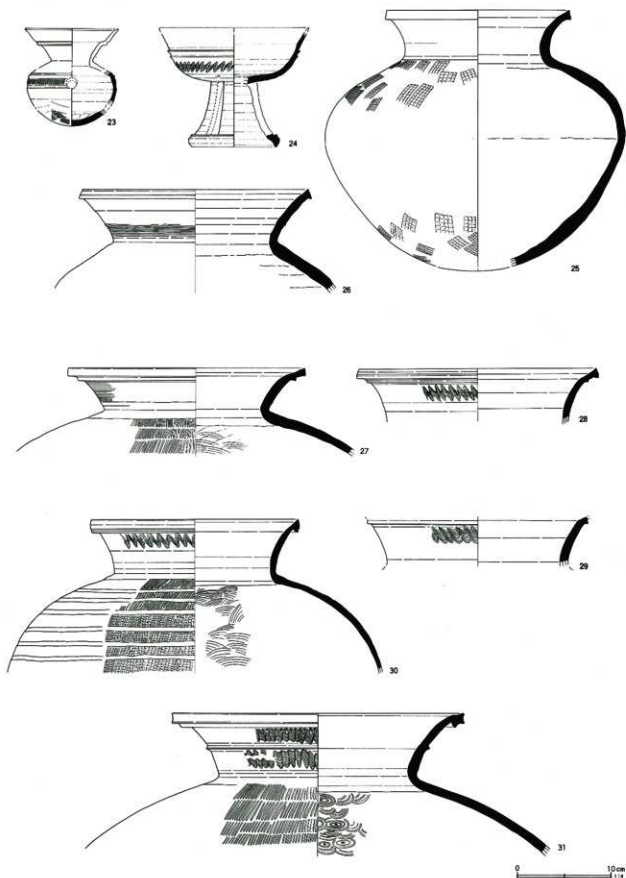
鉄製品は、土器集中1・2の西側の周溝底面に置かれたU字形刃先(58)と、後円部南東側の周溝テラス面を中心に52・53の刀子、54・55の鉄刀が出土してい

る。U字形刃先は耳部に折り返しをもつもので、このような耳部形態の類例はほとんどない。

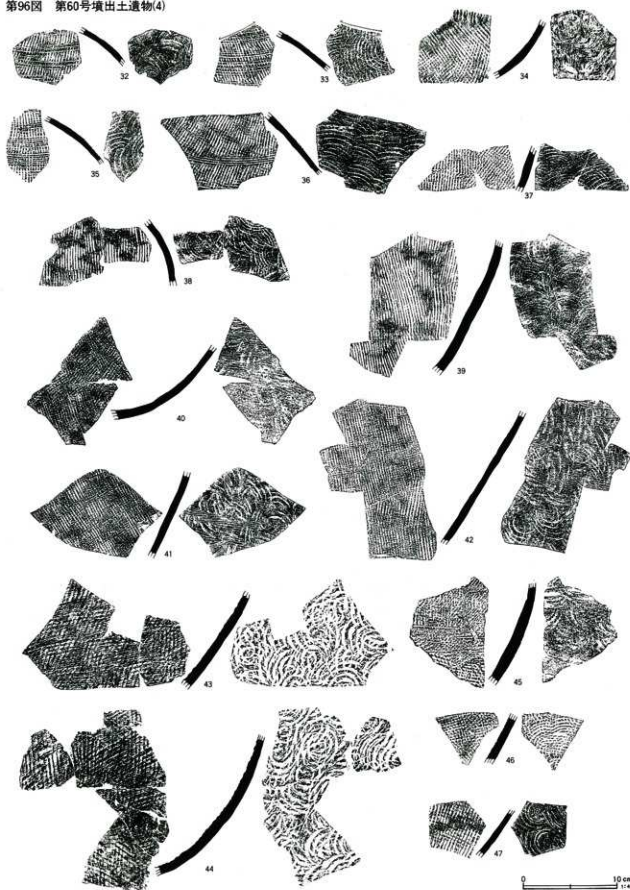
他に両丸造長三角式の鉄鎌(49)、鎌の着装部と思われる破片(56)、方形刃に鉄棒の貫通した小丸状の不明鉄製品(57)が出土している。

紡錘車は、西側舌れ部の周溝底面の中央からU字形刃先に伴って出土した59、前方部南西コーナー部から出土した61、後円部西側から出土した60、後円部東側から出土した62の合計4点が検出された。59は滑石製のもので、狭面を上にして斜めの状態で出土し、側面に刃傷状の痕跡が一部残る。60は滑石製で約1/2のみを遺存し、破断面に擦痕が認められた。61は須恵質のもので、断面半円形を呈し、約1/2の遺存である。狭面には降灰が認められる。62も須恵質のもので、断面形は厚みのある逆台形である。古墳群全体では約1/4に

第95図 第60号墳出土遺物(3)

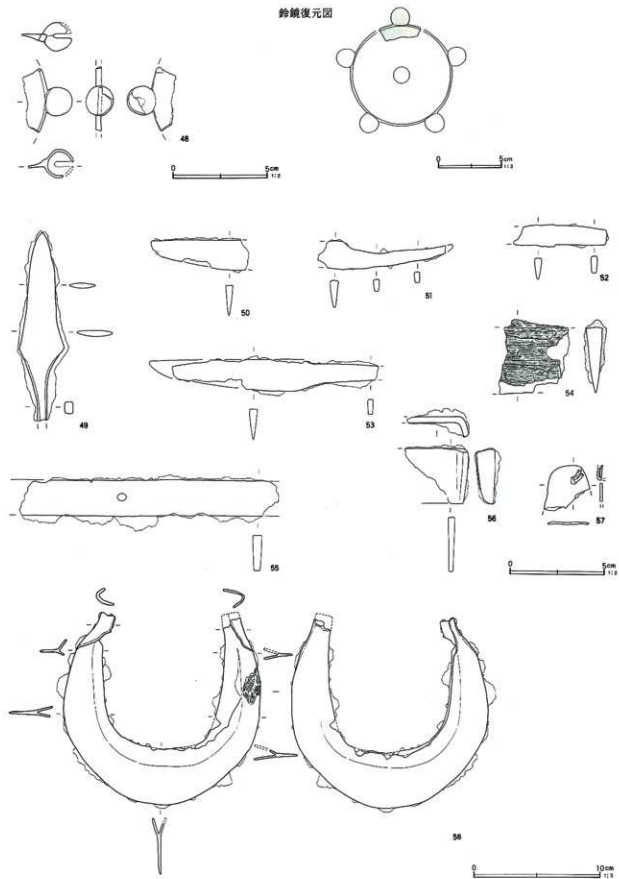


第96図 第60号墳出土遺物(4)

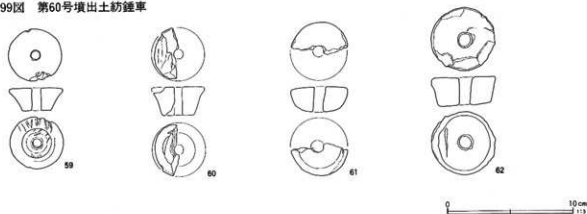


第97図 第60号墳出土鈴鏡

鈴鏡復元図



第99図 第60号墳出土紡錘車



第60号墳出土遺物観察表 (第93~99図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.8	5.6		BEF J	B	橙褐色	100	体部外面黒斑 器面風化
2	環	12.6	5.7		BEF J	B	橙褐色	100	体部外面黒斑
3	環	11.8	6.1		BDEF J	B	橙褐色	90	器面風化
4	匙	10.2	9.4		ABG J	A	暗灰色	100	口縁部歪む 内外面降灰
5	高環	15.0	11.5	9.7	ABG J	A	灰白色	85	三方透し 器面に自然釉の発泡あり
6	小型壺	15.6	22.0	5.8	DEF J	A	橙褐色	80	胴部外面黒斑
7	環	12.0	6.3		BEF J	B	橙褐色	100	体部外面黒斑 内面刃傷状痕跡あり
8	環	12.6	6.2		BEF	A	橙褐色	95	体部外面×形の黒影 内面刃傷状痕跡あり
9	環	12.5	5.5		BEF J	A	橙褐色	100	体部外面×形黒影 内面刃傷状痕跡あり
10	大型甌	13.6	16.0		ABG J	A	暗灰色	65	外面濃緑色自然釉付着
11	環	(11.4)	(5.5)		EF J	A	赤褐色	40	口縁部やや外傾
12	環	(12.8)	5.7		BF J	A	淡褐色	40	口縁部やや外傾 砂粒混入
13	環	(11.8)	(5.5)		BEF J	A	橙褐色	30	口縁部外反
14	鉢	24.0	11.0	8.0	AEF I J	B	橙褐色	95	体部外面黒斑 輪台状底部
15	壺	21.0			ADEF J	A	淡褐色	70	胴部外面黒斑 赤色粒子混入
16	壺		7.9		AEF J	A	淡黄色	70	胴部外面黒斑 内面剝離顕著 小環混入
17	甕	16.3	28.5	7.4	AEF J	B	淡黄色	80	内外面腐付着 被熱痕あり
18	丸甕	25.0			AEF J	A	橙褐色	60	胴部外面ヘラケズリ後ナゲ 赤色粒子混入
19	甕	16.6			AEF J	A	浅黄橙色	40	胴部外面黒斑
20	壺		(6.1)		EF J	B	黄褐色	60	輪台状底部 外面黒斑
21	壺		6.9		AEF	B	橙褐色	60	胴部外面黒斑
22	壺		7.4		AEFI J	C	淡褐色	60	輪台状底部 赤色粒子混入
23	甌				ABG J	A	灰色	20	図上復元 櫛波状文施文
24	高環	(15.8)	12.6	(8.8)	ABG J	A	青灰色	40	三方透し 内外面降灰 口唇部打ち欠く
25	甕	19.6	(27.5)		EF J	C	灰白色	60	酸化焙焼成 外面縦格子印目 内面剝離
26	甕	(24.0)			ABDG	A	灰白色	40	内外面濃緑色自然釉付着 内面ナゲ
27	甕	(25.0)			DG J	A	灰白色	30	自然釉付着 外面平行印目 内面ナゲ消し
28	甕	(25.3)			ABDG	A	灰色	15	櫛波状文施文
29	甕				AB J	A	暗青灰色	10	櫛波状文施文 内面降灰
30	甕	(22.0)			AB J	A	青黑色	40	外面縦格子印目後ナゲ 内面ナゲ消し
31	甕	(30.8)			AB J	A	黒褐色	40	凸線区画 外面平行印目 内面同心円文
32	甕				DG J	A	灰白色		外面行印目後カキ目 内面ナゲ消し
33	甕				BDG J	A	暗青灰色		外面平行印目後カキ目 内面同心円文
34	甕				BG J	A	灰色		外面平行印目 内面ナゲ消し
35	甕				BG J	A	暗灰色		外面縦格子印目 内面ナゲ消し 砂粒混入
36	甕				BD J	A	灰色		外面縦格子印目後カキ目 内面ナゲ消し
37	甕				BG J	B	灰色		外面縦格子印目 内面ナゲ消し
38	甕				BG J	A	灰白色		39と同一個体 自然釉付着
39	甕				BG J	A	灰白色		外面平行印目 内面同心円文 38と同一
40	甕				BG J	A	灰色		内面自然釉付着 41・42と同一個体
41	甕				BG J	A	黒褐色		外面縦格子印目 内面同心円文後カキ目
42	甕				BG J	A	黒褐色		40・41と同一個体
43	甕				BEF J	C	黒褐色		外面縦格子印目 内面同心円文 在地産
44	甕				BEF J	C	灰色		42と同一個体 在地産

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
45	甕				A B D J	A	暗青灰色		外面平行印目後カキ目 内面ナゲ消し
46	甕				B G J	B	灰色		外面擬格子印目 内面同心円文
47	甕				B G J	A	暗灰色		内面降灰 外面平行印目 内面ナゲ消し
48	鈴	復原径8.0、鈴径1.5×1.4、線厚0.3cm、重量5.72g							五鈴鏡か 鏡面一部赤色
49	鉄線	遺存長10.1、身幅1.4×厚さ0.3cm、重量24.6g							丸丸長三角形式
50	刀子	遺存長5.2、身幅1.6、背幅0.4cm、重量7.85g							切先破片 表面割離
51	刀子	遺存長6.8、身幅1.45、背幅0.4cm、重量5.06g							背肉 刃肉は不明瞭
52	刀子	遺存長5.1、身幅1.2、背幅0.4cm、重量4.8g							刀肉 茎一部木質付着
53	刀子	遺存長11.0、身幅1.6、背幅0.4cm、重量17.32g							刃間撫角 茎一部木質付着
54	鉄刀	遺存長3.8、身幅3.4、背幅0.9cm、重量29.16g							刀身部破片 鞘木付着
55	鉄刀	遺存長13.9、身幅1.9、背幅0.5cm、重量46.66g							茎部か 錆化顕著 円孔あり
56	鎌	遺存長3.4、厚さ0.3cm、重量12.26g							鎌の柄残著部か
57	鉄製品	長さ2.4、幅1.5、厚さ0.1cm、重量2.02g							不明鉄製品 矩形孔あり 鉄棒貫通
58	鋤先	長さ15.0、幅15.6cm、重量127.3g							U字形刀先 耳部折り返し 木質付着
59	紡錘車	広径4.3×狭径2.4×孔径0.7×厚さ1.8cm、重量36.72g							滑石製 遺残品 下面使用痕あり
60	紡錘車	広径(4.3)×狭径(2.6)×孔径(0.75)×厚さ2.3cm、重量(18.29)g							滑石製 灰褐色 破断面擦痕あり
61	紡錘車	広径4.5×狭径3.4×孔径0.85×厚さ2.1cm、重量(21.22)g							陶質 焼成堅緻 灰色 外面降灰
62	紡錘車	広径5.0×狭径4.4×孔径0.9×厚さ2.3cm、重量63.16g							陶質 焼成普通 灰褐色 片岩粒混入

相当する19基の古墳から紡錘車が出土しているが、一つの古墳から複数の紡錘車が出土した例は第49号墳と当墳のみであり、軌立貝形前方後円墳としての特殊性が窺われる。

円筒埴輪は破片総数で20,000点を越え、周溝全体からまんべんなく出土している。とりわけ括れ部の両側に集中したあり方を示し、その広がりには後円部西側にまで及んでいた。後円部北側では部分的に埴輪の集中箇所が認められているが、次第に出土量を減じ、後円部東側ではやや希薄となり、築造当初の埴輪の樹立状況にある程度反映しているものと想定される。

前述したように周溝外縁部では円筒埴輪の出土量が相対的に少なくなっているにもかかわらず、完形に近い個体が周溝外側から転倒した状態で検出されており、周溝外縁部にも一定の間隔をおいて円筒埴輪が樹立されていた状況が復元される。

朝顔形埴輪の分布は、円筒埴輪と同じ括れ部の両側に集中し、後円部西側のV12-25グリッド、同北側のW14-9グリッド、同東側のV16-2グリッド等に小規模な集中が認められた。原位置を留めるものはなかったが、埴輪列中に何本かおきに限定的に樹立されていた状況が推察される。

円筒埴輪は全体の形態の分かるものは、すべて2条凸帯3段構成によって占められ、その多くは口縁部に

1個の小円孔を開けた「副次孔」をもつものであった。形態・色調・焼成等の特徴の違いからA~L類の12類に区分される。さらに各類は内面調整の差異から1~3種に細分される。以下、各類について概要を説明する。

A類は橙褐色を基調とし、最上段の内外面に赤彩を施すもので、透孔は円形である。器形は各段の幅がほぼ均等になるもので、副次孔を有する。凸帯は台形を呈するものが主体で、凸帯下には貼付時のナゲ痕(凸帯下沈線)がみられる。外面調整はハケメの細かい縦ハケ調整で、内面調整は最下段から中間段まで縦ハケを施し、最上段に右傾斜ハケを施すA1類、最下段にナゲ調整のみみられるA2類に区分される。A2類は一部須恵質のものを含む。

B類は基本的な特徴はA類に共通しているが、色調は淡褐色を基調とし、口唇部の作りにも若干の差異が認められる。最上段に径2~3cmの小円孔を1個だけ開けたものが多く、各段幅のほぼ均等なプロポーショナルである。外面調整は目の細かいタテハケを施し、内面調整は基部まで右傾斜ハケを施すB1類と、中間段まで右傾斜ハケを施し、最下段部分は指ナゲを丁寧に施すB2類がある。また口縁部外面に5本の縦条線のヘラ記号をもつ一群をB3類として分類した。透孔は円形のみで、凸帯は断面台形を呈し、凸帯下沈線が認

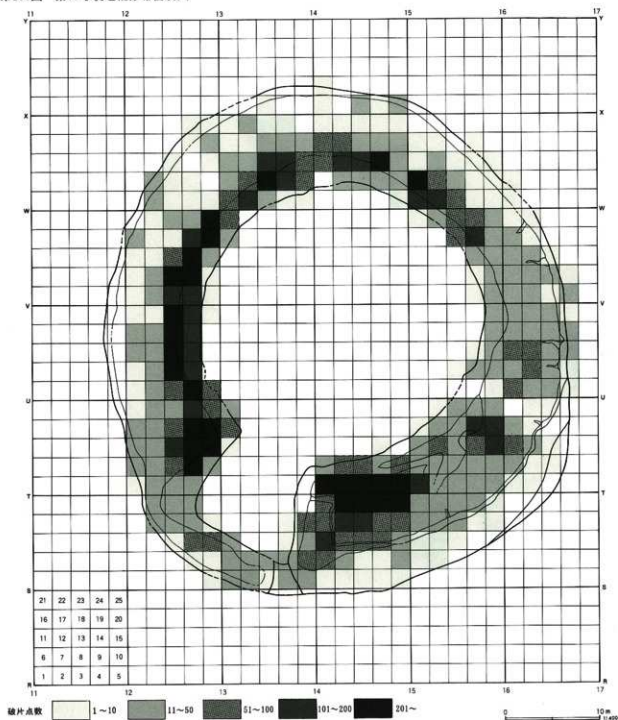
められる。

C類は淡褐色を基調とし、最上段の幅が他の段の幅よりも長く伸びた器形で、規格もA・B類より一回り大きい。内面調整の差異によりC1・C2類に区分される。C1類の内面調整は基部内面以外は縦・右傾斜ハケを施すものである。C2類は上段部の内面にのみ

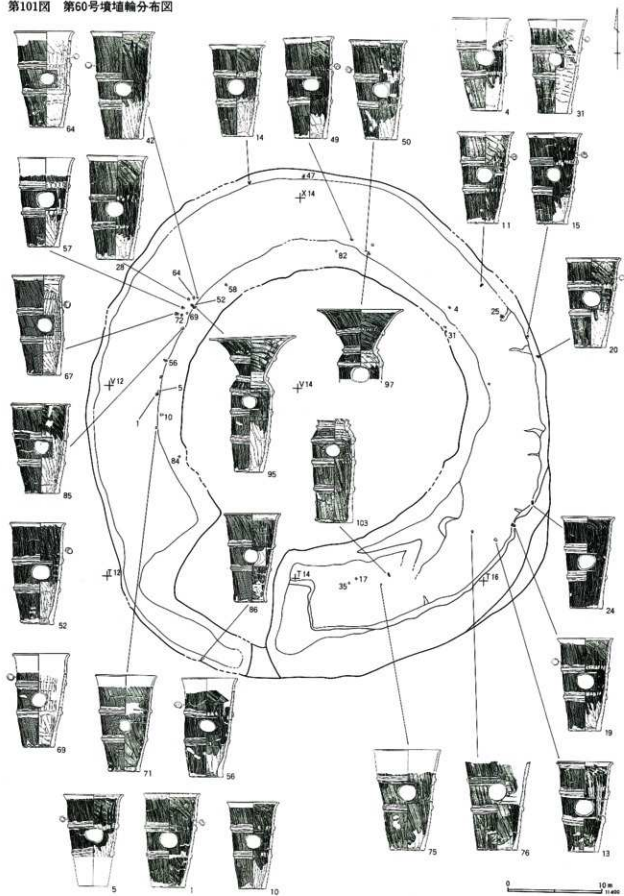
右傾斜ハケを施し、下半部はナデによって仕上げられている。ハケ工具は目の細かいものを使用している。C1類には副次孔を有するものは現状では認められないが、C2類には副次孔が認められる。

D類は、器形の特徴は概ねC類に共通し、最上段の幅の長いもので、灰褐色を基調とした須恵質が多いの

第100図 第60号墳埴輪分布密度図

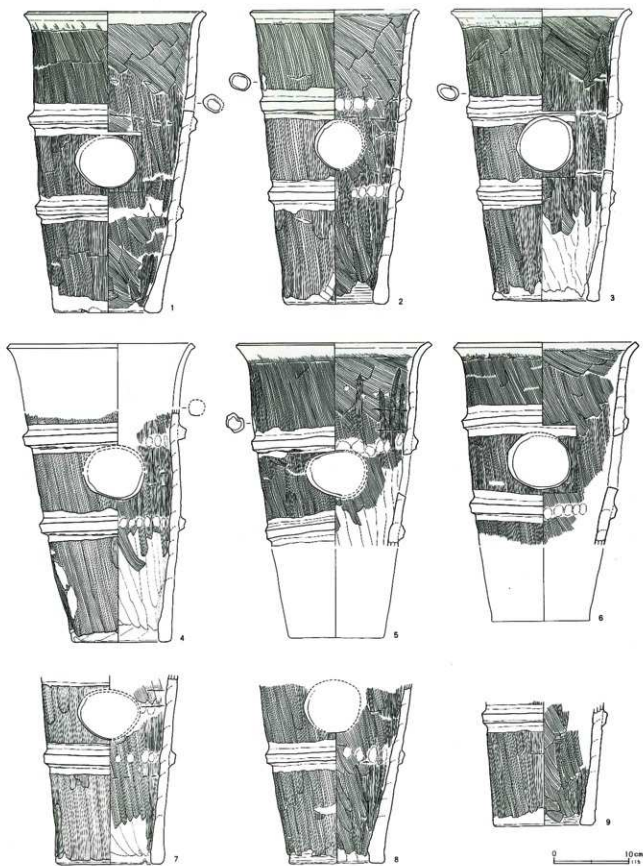


第101图 第60号墳埴輪分布图

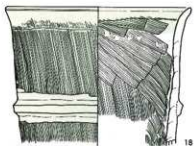
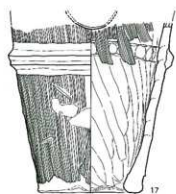
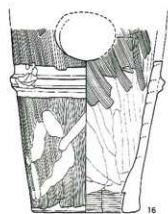
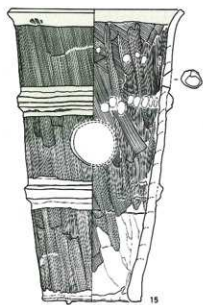
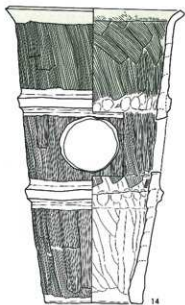
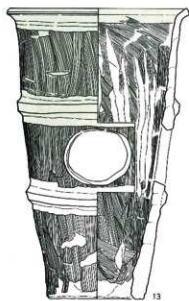
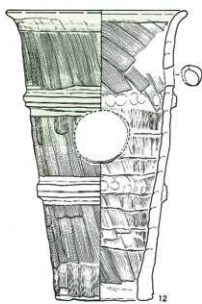
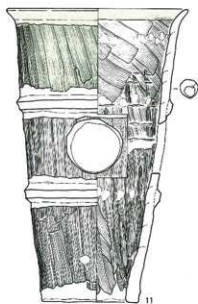
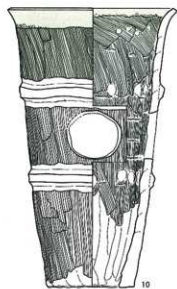




第102図 第60号墳円筒埴輪(I)

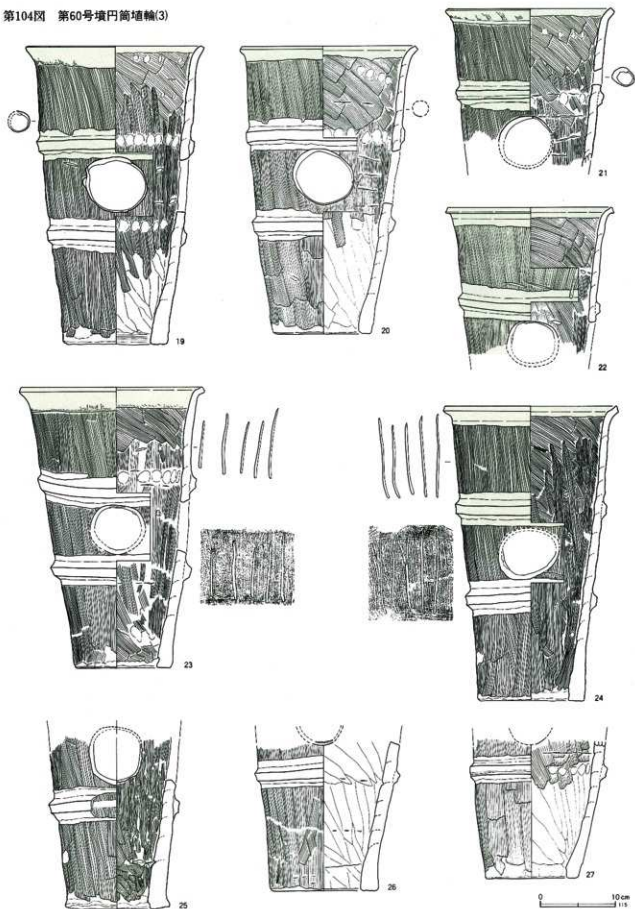


第103図 第60号埴円筒埴輪(2)

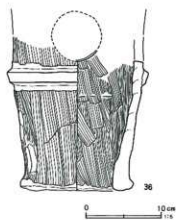
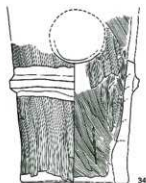
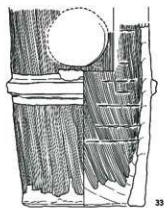
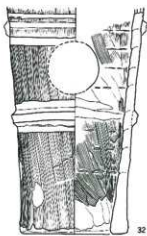
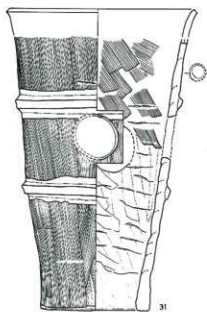
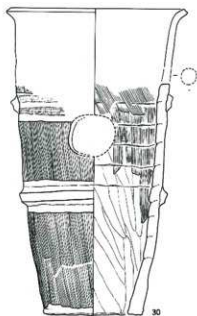
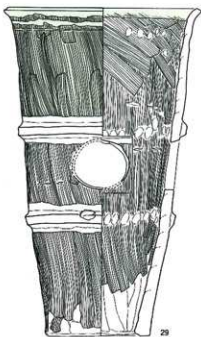
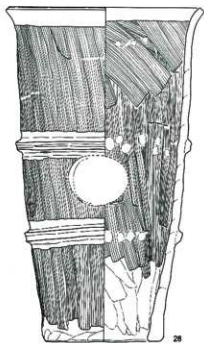


0 10cm  
1/4

第104図 第60号墳円筒埴輪(3)

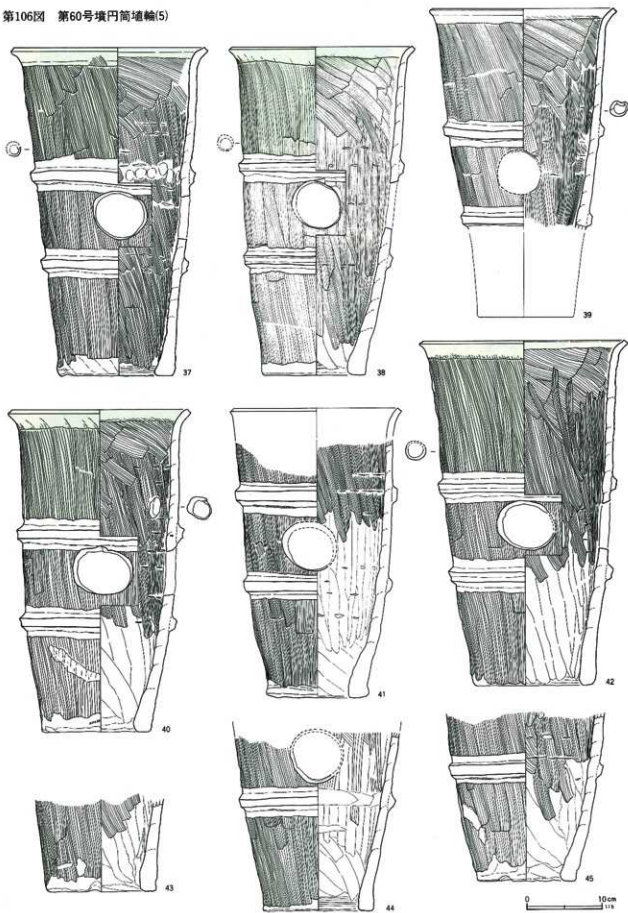


第105図 第60号墳円筒埴輪(4)

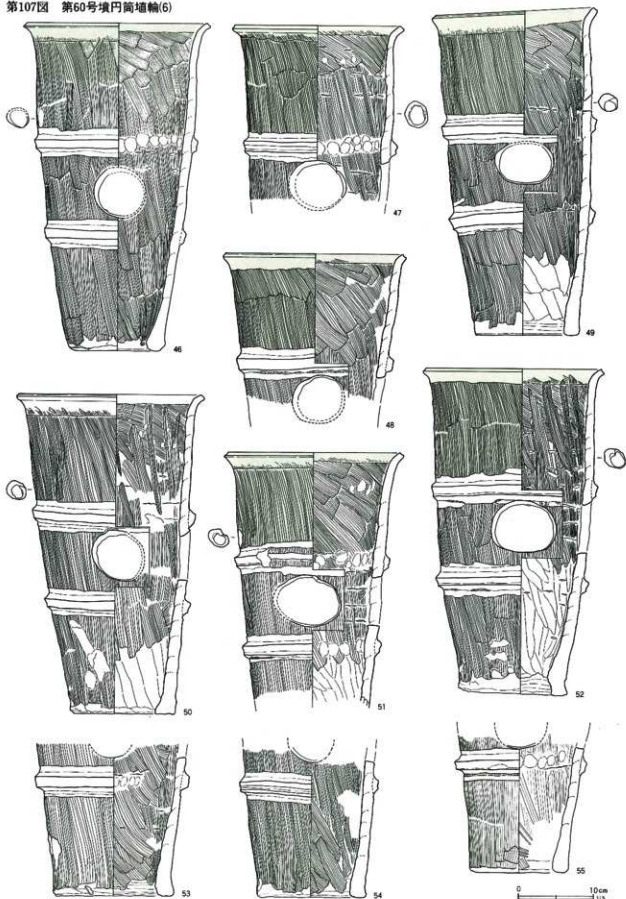


0 10 cm  
1/6

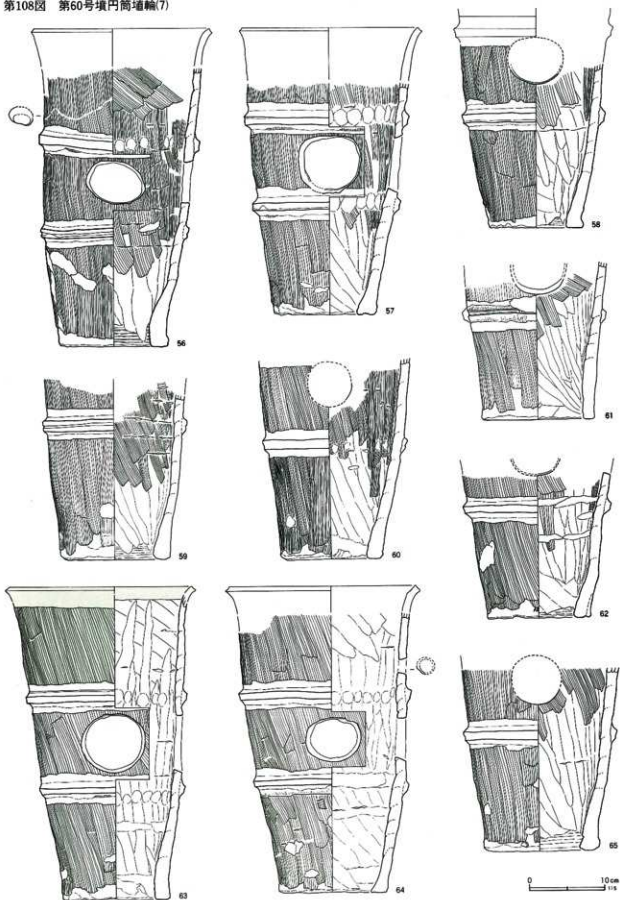
第106図 第60号墳円筒埴輪(5)



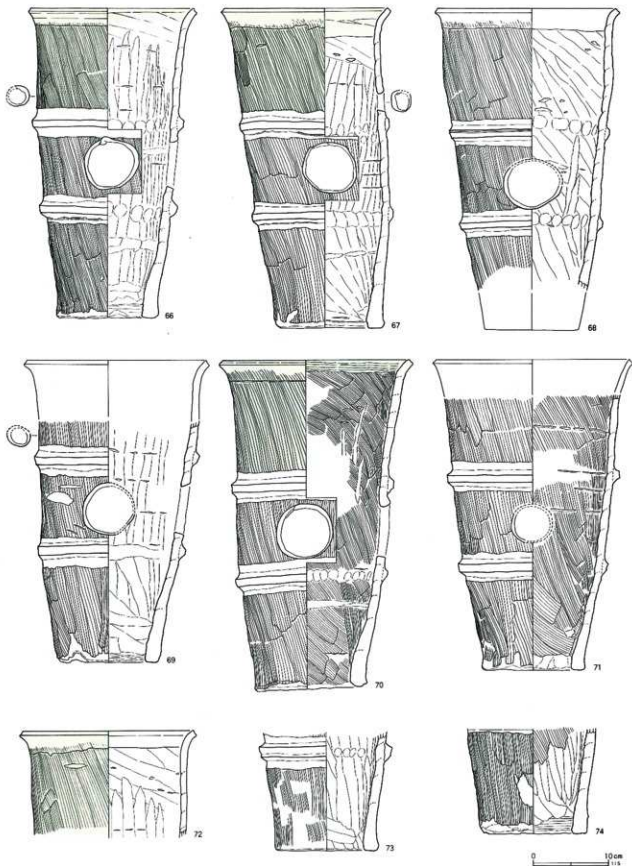
第107図 第60号墳円筒埴輪(6)



第108図 第60号墳円筒埴輪(7)

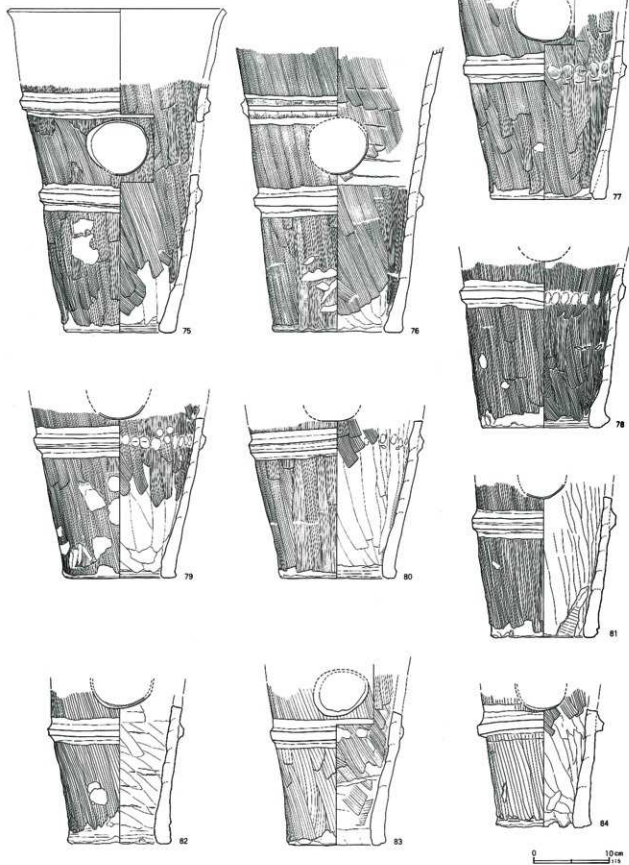


第109图 第60号埴田筒埴輪(8)

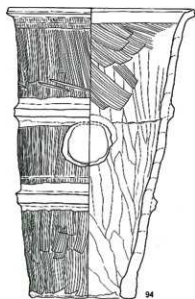
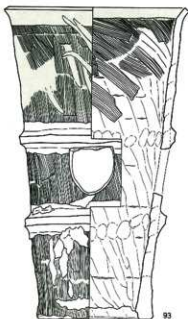
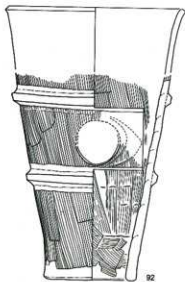
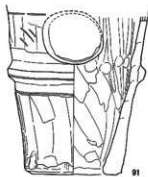
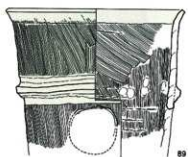
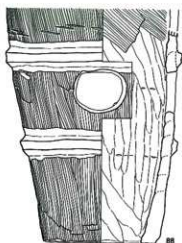
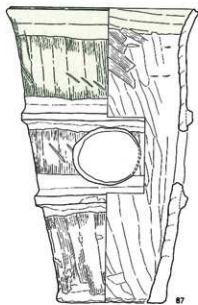
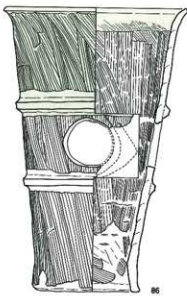
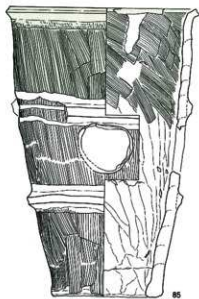




第110図 第60号墳円筒埴輪(9)



第111图 第60号填内筒墙轴00

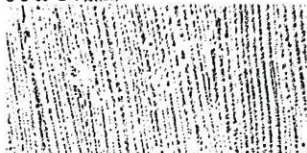


0 10 cm

SS 60 A 1 類(1)



SS 60 B 1 類(11)



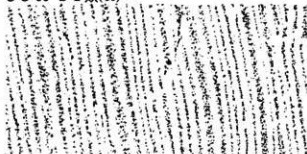
SS 60 B 3 類(23)



SS 60 C 2 類(30)



SS 60 D 2 類(40)



SS 60 A 2 類(10)



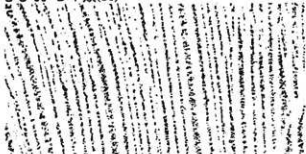
SS 60 B 2 類(15)



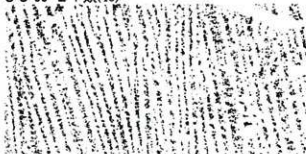
SS 60 C 1 類(29)



SS 60 D 1 類(38)



SS 60 E 1 類(46)



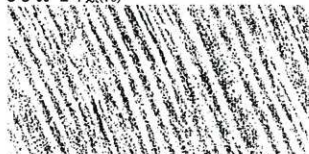
SS 60 E 2類(50)



SS 60 E 3類(66)



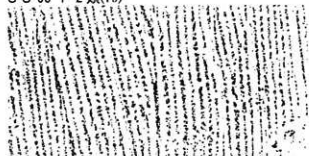
SS 60 E 4類(70)



SS 60 F 1類(77)



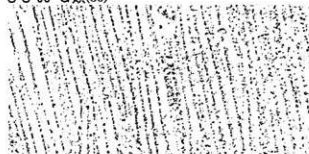
SS 60 F 2類(79)



SS 60 F 3類(88)



SS 60 G類(86)



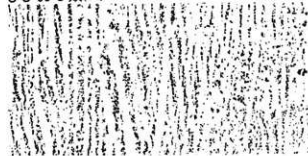
SS 60 H類(87)



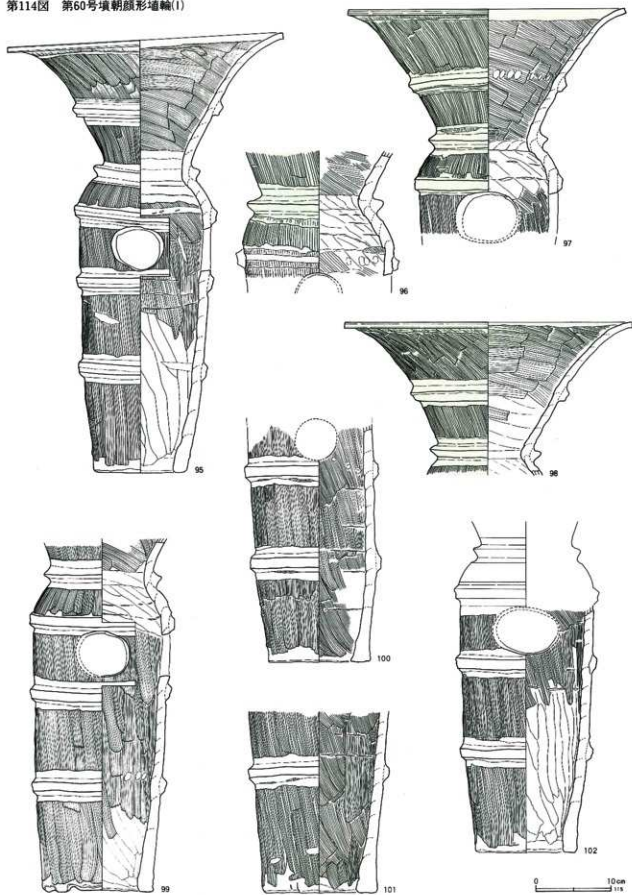
SS 60 I類(93)

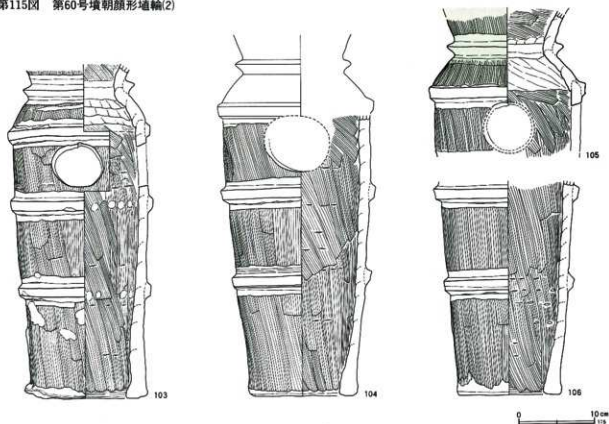


SS 60 J類(94)



第114図 第60号墳朝顔形埴輪(1)





が特徴である。全体にハケメが粗く、2cmあたり8本前後である。副次孔及び凸帯下沈線が認められる。内面調整の差異によりD1・D2類に細分される。D1類はナデ調整後、基部下端まで全面に右傾斜ハケを施すもの。D2類は中間段付近まで右傾斜ハケを施すものである。

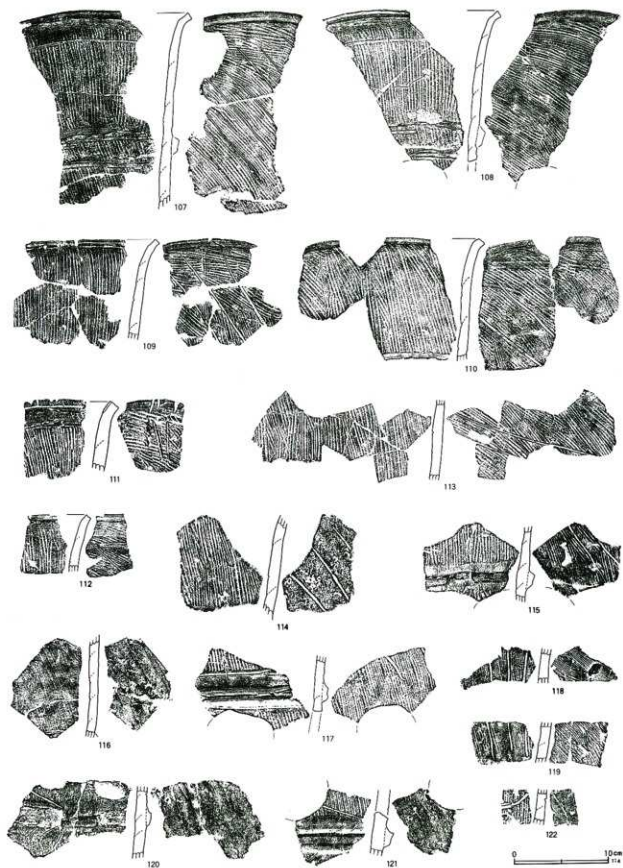
E類は器形・ハケメ等の特徴はD類に共通しているが、色調が淡褐色系が主体で、柔らかい仕上がりのものが多い。副次孔及び凸帯下沈線が認められ、最上段内外面の赤彩も顕著である。内面調整及びハケメの工具の相違によりE1～E4類に細分される。E1類は内面に右傾斜ハケをほぼ全面に施すもの。E2類は内面に右傾斜ハケを中間段付近まで施すもの。E3類は内面調整にハケメを用いずナデによって仕上げるもの。E4類は2cmあたり6～7本の粗いハケを用いるもので、内面調整は全面に右傾斜ハケを施すものと、中間段までのものがあり細分の可能性がある。

F類は全体の器形に分かるものは少ないが、比較的

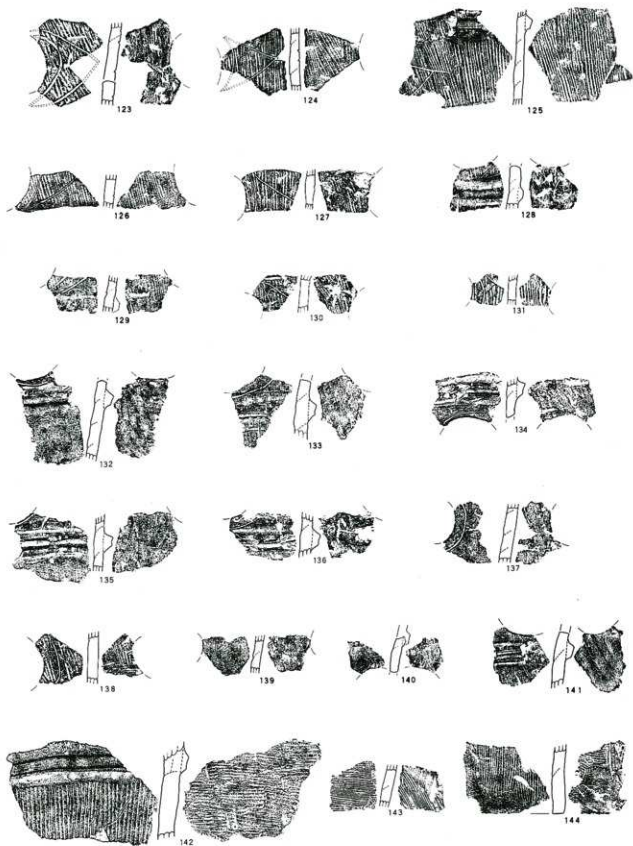
大振りの埴輪を一括し、F1～F3類に区分される。F1・F2類は最上段部分が遺存するものがないため全体の器形は明確でないが、底径が15～17cmと大きく、底部から直線的に外傾する器形と想定される。内面調整に差異がみられ、F1類はほぼ全面に右傾斜ハケを施し、F2類は第1凸帯の内面付近までハケメを施す。F3類はF1・2類に比べ、硬質の焼き上がりで、ハケもざらっとした感じの粗いハケに仕上がりが、やや異質である。しかし、器形は底径が大きく、口径との差が少なく、F1・2類に一致している。

G類は、いわゆる「銀杏葉文」のヘラ記号を有するものを一括した。ヘラ記号の施文状況の判明するものは86・92の2点のみであるため明確でないが、破片資料を含めすべて銀杏葉文は透孔の向かって右側に描かれ、一方の透孔のみに施文するのが原則のようである。栃木県域に分布する銀杏葉文線刻と比較すると曲線的な表現がなくなり、全体に三角形に近い表現に変化しているのが大きな特徴である。

第116图 第60号填円筒埴輪拓影图(1)

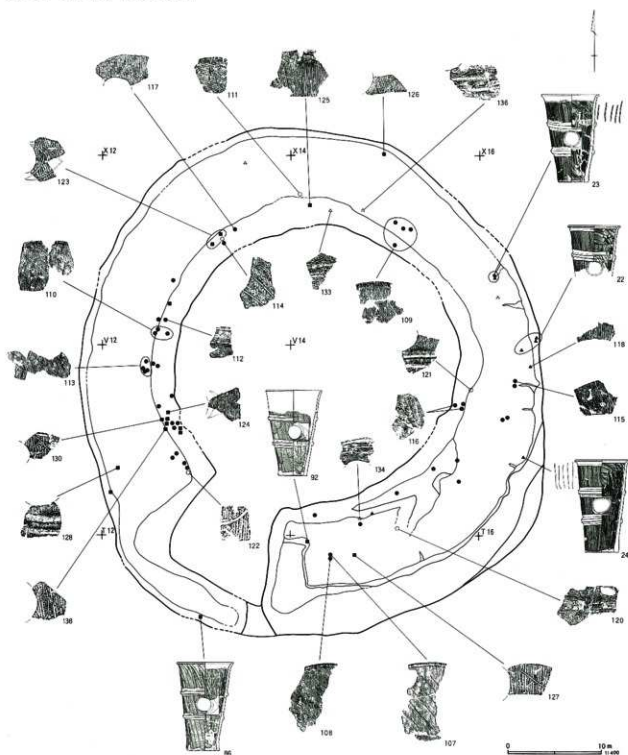


第117图 第60号填円筒埴輪拓影图(2)





第118図 第60号墳ヘラ記号分布図



ヘラ記号A (縦古麻文)    ヘラ記号B (円文)    ヘラ記号C (縦糸線)    ヘラ記号D (斜糸線)



凡例  
 ■ ヘラ記号A  
 △ ヘラ記号B  
 ▲ ヘラ記号C  
 ● ヘラ記号D  
 ○ ヘラ記号E

第60号墳出土埴輪観察表 (第102~111・114~117図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	
1	円筒	A1類	A E F J K	B	E	85	縦ハケ	11	右傾斜・縦ハケ	11	基部R接合 底面亀状圧痕 赤彩
2	円筒	A1類	A B F J L	A	C	55	縦ハケ	14	右傾斜・縦ハケ	14	基部内面木目圧痕 赤彩
3	円筒	A2類	A F G J L	A	C	70	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	12	基部R接合・内面掌紋圧痕 赤彩
4	円筒	A2類	A F G J L	A'	C	80	縦ハケ	13	縦ハケ	14	基部R接合 底面龜圧痕
5	円筒	A2類	A F G J L	A	C	60	縦ハケ	14	右傾斜・縦ハケ	12	赤彩 副次孔あり
6	円筒	A2類	A F G J K	A	C	70	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	13	赤彩 凸帯下洗線あり
7	円筒	A1類	A E F J K	A	C	30	縦ハケ	14	縦ハケ	14	基部R接合・凸帯下洗線あり
8	円筒	A1類	A B F G J	A	C	50	縦ハケ	13	右傾斜ハケ	15	基部L接合・内面掌紋圧痕
9	円筒	A1類	A B F J K	A	C	60	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	14	基部内面木目圧痕 底面龜圧痕
10	円筒	A2類	A F G J L	B	C	85	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	12	基部R接合 底面平坦 赤彩
11	円筒	B1類	A E F J L	B	D	95	縦ハケ	12	右傾斜・縦ハケ	14	基部R接合・内面掌紋圧痕 赤彩
12	円筒	B1類	A F G J L	B	D	60	縦ハケ	14	右傾斜・縦ハケ	13	赤彩 副次孔・凸帯下洗線あり
13	円筒	B1類	A F G J K	A	E	65	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	12	基部内面ナデ 赤彩
14	円筒	B2類	A E F G J	B	D	55	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	12	基部内面掌紋圧痕
15	円筒	B2類	A E F J L	B	D	55	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	12	基部R接合 赤彩
16	円筒	A2類	A B F G J	A'	D	50	縦ハケ	10	右傾斜ハケ	12	基部R接合・内面横ハケ
17	円筒	A2類	A E F J L	A	D	90	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	10	基部R接合 底面赤色粒子付着
18	円筒	B1類	A F G J K	B	C	60	縦ハケ	12	右傾斜・縦ハケ	12	基部R接合 底面赤色粒子付着
19	円筒	B2類	A E F J L	B	D	90	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	14	基部R接合・内面木目圧痕 赤彩
20	円筒	B2類	A F G J L	B	D	80	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	11	基部R接合・内面掌紋圧痕 赤彩
21	円筒	B2類	A E F J K	B	D	60	右傾斜ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	12	赤彩 副次孔あり
22	円筒	B3類	A E F J K	B	D	60	縦ハケ	10	右傾斜ハケ	12	外面へう記号C 赤彩
23	円筒	B3類	A B E F J	C	D	70	縦ハケ	12	右傾斜・縦ハケ	12	外面へう記号C 赤彩
24	円筒	B3類	A E F J L	A	D	60	縦ハケ	10	右傾斜・縦ハケ	11	外面へう記号C 赤彩
25	円筒	B3類	A E F J L	A	D	40	縦ハケ	12	右傾斜・縦ハケ	10	底面赤色粒子付着
26	円筒	A2類	A B E F J	A	D	55	縦ハケ	13	指ナデ	基部R接合 炭化繊維混入	
27	円筒	A2類	A B E F J	C	E	65	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	14	基部内面掌紋圧痕 底面平坦
28	円筒	C1類	A B E F J	A	E	60	縦ハケ	12	右傾斜・縦ハケ	12	炭化繊維混入 赤彩残存
29	円筒	C1類	A B E F J	A'	C	80	縦ハケ	14	右傾斜・縦ハケ	12	基部R接合 赤彩 凸帯下洗線
30	円筒	C2類	A E F J K	B	E	40	縦ハケ	13	右傾斜ハケ	13	基部R接合 副次孔・凸帯下洗線
31	円筒	C2類	A F G J K	B	D	80	縦ハケ	15	右傾斜ハケ	11	基部内面掌紋圧痕 炭化繊維混入
32	円筒	C1類	A E F J	B	D	45	縦ハケ	13	右傾斜ハケ	15	底面平坦 凸帯下洗線あり
33	円筒	C1類	A E F J K	C	D	70	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	14	外面補修痕 基部R接合
34	円筒	B3類	A E F J L	A	E	80	縦ハケ	11	右傾斜ハケ	11	基部L接合・内面掌紋圧痕
35	円筒	C1類	A E F J K	A	E	90	縦ハケ	12	右傾斜・縦ハケ	12	基部R接合 底面亀状圧痕
36	円筒	D1類	A E F J K	A	F	40	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	外面補修痕 凸帯下洗線あり
37	円筒	D1類	A B E F J	A'	F	85	縦ハケ	11	右傾斜・縦ハケ	8	基部R接合 赤彩
38	円筒	D1類	A B F J L	A'	F	70	縦ハケ	8	右傾斜・縦ハケ	8	基部内面木目圧痕 赤彩 副次孔
39	円筒	D1類	A B F J L	A'	F	40	右傾斜ハケ	7	右傾斜・縦ハケ	8	赤彩残存 副次孔あり
40	円筒	D2類	A B F J L	A'	C	80	縦ハケ	8	右傾斜・縦ハケ	8	基部R接合 赤彩
41	円筒	D2類	A E F J K	A'	D	50	縦ハケ	10	右傾斜ハケ	9	凸帯下洗線あり
42	円筒	D2類	A D E F J	A'	C	70	縦ハケ	9	右傾斜・縦ハケ	8	基部R接合・内面木目圧痕 赤彩
43	円筒	D2類	A F J	A'	C	80	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	10	基部R接合・外面掌紋圧痕
44	円筒	D2類	A B E F J	A'	F	70	右傾斜ハケ	9	右傾斜・縦ハケ	7	基部内面木目圧痕
45	円筒	D2類	A E F J K	A	C	40	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	10	底面赤色粒子付着
46	円筒	E1類	A E F J K	A	E	55	縦ハケ	10	右傾斜・縦ハケ	11	底面赤色粒子付着 赤彩 副次孔
47	円筒	E1類	A E F J K	A	E	60	縦ハケ	8	右傾斜・縦ハケ	9	赤彩 副次孔・凸帯下洗線あり
48	円筒	E1類	A E F J K	A	C	70	右傾斜ハケ	9	右傾斜・縦ハケ	9	赤彩 凸帯下端部付粗織
49	円筒	E2類	A E F J K	B	D	80	縦ハケ	10	右傾斜・縦ハケ	8	基部R接合・内面木目圧痕 赤彩
50	円筒	E2類	A E F J K	A	E	60	縦ハケ	10	右傾斜ハケ	8	基部R接合・内面木目圧痕
51	円筒	E2類	A E F J K	A	E	45	縦ハケ	10	右傾斜・縦ハケ	8	赤彩 副次孔・凸帯下洗線あり
52	円筒	E2類	A E F J K	A	D	90	縦ハケ	9	右傾斜・縦ハケ	8	基部R接合・内面木目圧痕 赤彩
53	円筒	E1類	A B E F J	A	E	80	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	基部R接合 底面赤色粒子付着
54	円筒	E1類	A E F J K	B	E	80	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	9	基部R接合 底面龜圧痕
55	円筒	E1類	B E F J K	B	E	45	縦ハケ	7	縦ハケ	8	底面龜圧痕 凸帯下洗線あり
56	円筒	E2類	A E F G J	B	D	90	縦ハケ	8	右傾斜・縦ハケ	10	基部R接合・内面木目圧痕
57	円筒	E2類	A E F J K	A	D	70	縦ハケ	6	縦ハケ	7	基部R接合 底面赤色粒子付着
58	円筒	E2類	A E F J K	A	E	90	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	8	基部R接合・内面木目圧痕
59	円筒	E2類	A E F J K	B	D	40	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	11	基部内面木目圧痕

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	
60	円筒	E2類	AFGJK	B	E	70	縦ハケ	10	縦ハケ	8	底面羅圧痕・赤色粒子付着
61	円筒	E2類	AFGJL	A	E	90	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	基部R接合・内面掌紋圧痕
62	円筒	E2類	AEFJL	A	D	55	右傾斜ハケ	7	右傾斜・縦ハケ	8	基部R接合・内面木目圧痕
63	円筒	E3類	AEFJK	B	E	65	右傾斜ハケ	6	指ナデ		基部R接合 赤彩
64	円筒	E3類	AFGJK	B	E	55	右傾斜ハケ	7	指ナデ		基部R接合 赤彩
65	円筒	E2類	AEFJK	B	D	30	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	9	基部内面木目圧痕 凸帯下沈線
66	円筒	E3類	AEFJK	B	E	55	右傾斜ハケ	8	指ナデ		基部内面木目圧痕 赤彩
67	円筒	E3類	AEFJL	A	E	60	右傾斜ハケ	6	指ナデ		基部R接合 底面羅圧痕 副次孔
68	円筒	E3類	EFGJL	B	E	70	右傾斜ハケ	8	指ナデ		赤彩残存 凸帯下沈線あり
69	円筒	E3類	AEFJK	B	E	80	右傾斜ハケ	7	指ナデ		基部R接合・内面木目圧痕
70	円筒	E4類	AEFJK	B	E	55	右傾斜ハケ	7	右傾斜ハケ	8	基部R接合 底面羅圧痕 赤彩
71	円筒	E4類	AEFJK	B	E	70	右傾斜ハケ	8	右傾斜ハケ	8	基部R接合・内面掌紋圧痕 赤彩
72	円筒	E3類	ABEFJ	A	E	70	縦ハケ	7	ナデ		赤彩
73	円筒	E3類	AFJK	C	E	50	縦ハケ	9	指ナデ		基部内面掌紋圧痕 凸帯下沈線
74	円筒	E2類	AEFJK	A	E	80	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	基部R接合・内面木目圧痕
75	円筒	F1類	AEEFGJ	A	E	75	縦ハケ	10	右傾斜ハケ	10	基部内面木目圧痕
76	円筒	F1類	ABFJK	A	E	45	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	10	内面ハケ工具痕 (11本/2.5cm)
77	円筒	F1類	ABGJ	A'	D	90	右傾斜ハケ	11	縦ハケ	12	基部R接合 底面羅圧痕
78	円筒	F1類	AFGJK	B	E	70	縦ハケ	9	縦ハケ	12	基部R接合・内面木目圧痕
79	円筒	F2類	AEFJL	A	E	45	縦ハケ	12	縦ハケ	12	基部内面木目圧痕
80	円筒	F2類	AEFJK	C	E	60	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	9	基部内面木目圧痕
81	円筒	E3類	AEFJK	B	E	40	縦ハケ	8	指ナデ		基部R接合・内面木目圧痕
82	円筒	E3類	ABEFJ	B	E	70	縦ハケ	9	指ナデ		基部R接合・内面木目圧痕
83	円筒	E4類	AEFJK	B	E	60	右傾斜ハケ	5	右傾斜ハケ	9	基部内面掌紋圧痕 底面羅圧痕
84	円筒	E4類	ABEFJ	A	C	90	縦ハケ	6	右傾斜ハケ	7	基部R接合 粗いハケメ調整
85	円筒	F3類	AFGJ	B	E	90	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	内面補修痕 基部L接合 赤彩
86	円筒	G類	AEFJK	B	E	70	右傾斜ハケ	7	右傾斜・縦ハケ	7	外面へラ記号A 赤彩
87	円筒	H類	ABFJK	A'	C	80	板ナデ		板・指ナデ		底面赤色粒子付着 赤彩 須惠質
88	円筒	F3類	AFGJK	A'	C	70	縦ハケ	9	右傾斜ハケ	8	基部R接合 底面羅圧痕 赤彩
89	円筒	G類	AFGJ	A	C	45	縦ハケ	9	右傾斜・縦ハケ	9	赤彩
90	円筒	EFG	EFJ	C	E	30	縦ハケ	13	右傾斜ハケ	12	口唇部外折
91	円筒	H類	ABFGJ	A	C	80	板ナデ		指ナデ		基部R接合・内面掌紋圧痕
92	円筒	G類	AEFJK	B	C	60	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	外面へラ記号A 赤彩
93	円筒	I類	ABGJL	A'	D	85	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	14	半円形透孔 外面補修痕 赤彩
94	円筒	J類	AFJL	A'	F	70	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	基部二帯付着 赤彩
95	朝顔	A2類	AFGJK	A'	D	95	右傾斜・縦ハケ	14	横・縦ハケ	14	口縁部歪み 基部R接合 赤彩
96	朝顔	E1類	AEFJK	B	E	70	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	赤彩 凸帯下沈線あり
97	朝顔	C1類	AEFJK	B	E	55	縦ハケ	12	横ハケ	12	赤彩
98	朝顔	D1類	AEFJK	A	C	80	右傾斜・縦ハケ	8	横ハケ	8	赤彩
99	朝顔	A2類	AFGJL	A'	F	70	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	15	基部R接合・内面掌紋圧痕
100	朝顔	C1類	AEFJK	B	D	30	縦ハケ	12	縦ハケ	14	基部外面掌紋圧痕 底面羅圧痕
101	朝顔	A1類	ABFJL	A'	C	80	縦ハケ	12	右傾斜・縦ハケ	12	基部R接合・内面ナデ
102	朝顔	C2類	AEFJK	A	E	60	縦ハケ	13	右傾斜・縦ハケ	14	底面羅圧痕 赤彩 凸帯下沈線
103	朝顔	D1類	ABFGJ	A'	F	95	縦ハケ	10	右傾斜・縦ハケ	10	基部R接合・内面木目圧痕
104	朝顔	D1類	AFGJK	A'	C	60	縦ハケ	10	右傾斜・縦ハケ	9	須惠質
105	朝顔	D1類	AEFJK	A	C	80	縦ハケ	8	横・右傾斜ハケ	8	赤彩
106	朝顔	D1類	AEFJK	A'	C	30	縦ハケ	9	縦ハケ	9	基部外面掌紋・内面木目圧痕
107	円筒	K類	AEFJ	B	E		縦ハケ	7	右傾斜ハケ	7	内面へラ記号D 赤彩
108	円筒	K類	AEFJ	A	E		縦ハケ	7	右傾斜ハケ	8	内面へラ記号D 赤彩
109	円筒	K類	AFJ	A	E		縦ハケ	8	横ハケ	9	内面へラ記号D 赤彩
110	円筒	K類	AEFJ	A	E		縦ハケ	6	右傾斜ハケ	7	内面へラ記号D 赤彩
111	円筒	EFG	EFJ	B	E		縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	口唇部内面割目・へラ記号E
112	円筒	K類	AEFJK	A	E		縦ハケ	9	右傾斜ハケ	9	内面へラ記号D 赤彩
113	円筒	K類	EFJ	A	E		縦ハケ	7	右傾斜ハケ	8	内面へラ記号D 赤彩
114	円筒	K類	AEFJ	C	E		縦ハケ	10	ナデ		内面へラ記号D
115	円筒	K類	EFJ	C	E		縦ハケ	8	右傾斜ハケ	9	内面へラ記号D 赤彩
116	円筒	K類	AEFJK	A	E		右傾斜ハケ	11	指ナデ		内面へラ記号D 赤彩
117	円筒	K類	EFJ	B	E		縦ハケ	7	右傾斜ハケ	10	内面へラ記号D
118	円筒	B3類	EFJ	A	D		縦ハケ	8	右傾斜ハケ	11	外面へラ記号C 赤彩
119	円筒	B3類	EFJ	C	D		縦ハケ	10	右傾斜ハケ	12	外面へラ記号C

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
120	円筒	E F J	A	E		板ナデ		指ナデ		外面へう記号E
121	円筒	A F J	B	E		縦ハケ	10	指ナデ		外面へう記号E
122	円筒	E F J	B	E		縦ハケ		8 指ナデ		外面へう記号E
123	円筒	G類	E F J	B	E	縦ハケ		9 指ナデ		外面へう記号A
124	円筒	G類	A B J	A'	E	縦ハケ		9 右傾斜ハケ	8	外面へう記号A
125	円筒	G類	A E F J	A	E	縦ハケ		9 縦ハケ	8	外面へう記号A
126	円筒	G類	A B J	A'	D	縦ハケ	7	右傾斜ハケ	8	外面へう記号A
127	円筒	G類	B F J	B	E	縦ハケ	6	縦ハケ	7	外面へう記号A
128	円筒	G類	A B F J K	B	E	縦ハケ	10	ナデ		外面へう記号A
129	円筒	G類	A E F J	B	E	縦ハケ	8	縦ハケ	8	外面へう記号A
130	円筒	G類	A F J	C	E	縦ハケ	9	縦ハケ	9	外面へう記号A
131	円筒	G類	B F J	B	E	縦ハケ	6	縦ハケ	8	外面へう記号A
132	円筒	L類	B F J L	A	A	板ナデ		指ナデ		外面へう記号B
133	円筒	L類	E F J	A	B	板ナデ		ナデ		外面へう記号B
134	円筒	L類	B F J	A	B	板ナデ		ナデ		外面へう記号B
135	円筒	L類	B D F J	A	D	板ナデ		ナデ		外面へう記号B
136	円筒	L類	B F J	A	B	板ナデ		ナデ		外面へう記号B
137	円筒	L類	D F J	A	B	板ナデ		指ナデ		外面へう記号B
138	円筒	G類	A F J	B	E	縦ハケ	8	縦ハケ	9	外面へう記号B
139	円筒	L類	A B E F J	A	B	板ナデ		ナデ		外面へう記号B
140	円筒	L類	A B E F J	A	B	板ナデ		ナデ		外面へう記号B
141	円筒		E F J	B	E	板ナデ		指ナデ		外面板ナデ調整
142	円筒		E F J	A	B	縦ハケ	6	横ハケ	6	内外面ハケ工具相違 大型円筒
143	円筒		B E F J	A	C	横ハケ	14	右傾斜ハケ	12	形象埴輪か
144	円筒		B E F	A	B	縦ハケ	9	横ハケ	9	外面板押圧 内面刀子ケズリ

H類は外面調整か板ナデ調整のもので、87・91の2点のみが出土した。各段の幅が等間隔に近いもので、最上段外面に赤彩を施す。

I類は半円形の透孔をもつもので、93の1点のみが出土した。外面調整は縦ハケ調整で最上段幅が他の段幅より長いのが特徴である。最下段外面には指ナデによる補修痕が残る。

J類は須恵質に近い仕上がりで、各段の幅が等間隔に近い。口縁部は短く外傾し、内面に浅い匙面を形成する。透孔は円形で、穿孔後指ナデを入念に施す。基部は二帯作りで、最上段の内外面に赤彩を施す。

K類は内面に斜条線のへう記号を有するものを一括した。破片資料しかないため器形の特徴は明確でないが、口唇部は短く外傾する。凸帯は台形で凸帯下には棒状工具による沈線が認められる。

L類は第61号墳に特徴的にみられる透孔の周囲に円文のへう記号をもつものである。色調は赤褐色を基調とし、外面調整は板ナデ調整と縦ハケ調整がある。出土位置から第61号墳から混入した可能性が強い。

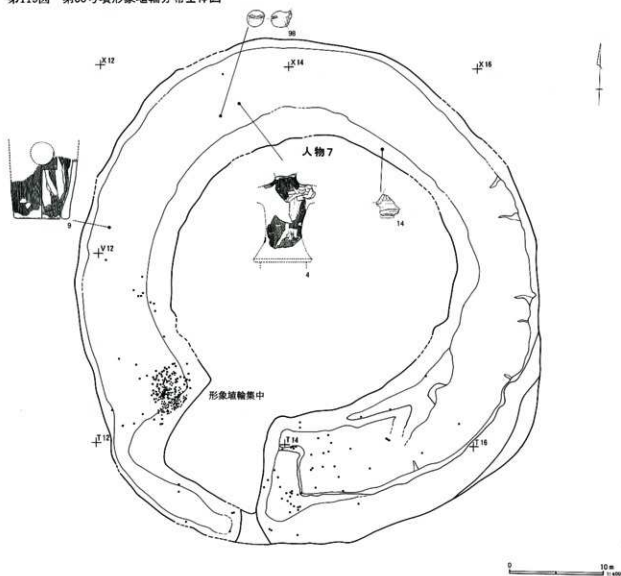
この他に90のように口唇部が短く外折する特徴的

な形態のものや、142のような大形円筒埴輪、143のような外面調整に横ハケを施した形象埴輪の可能性のある破片、板叩きによる底部調整をもつ破片がある。

朝顔形埴輪は、円筒部に2条の凸帯を巡らし、第3段に円形透孔を一对穿つ。肩部、頸部、花状部にそれぞれ凸帯を巡らし、頸部凸帯は断面三角形を呈する。肩部は2ないし3回ほど粘土紐を巻き上げて成形し、花状部はハの字状に大きく外反する。焼成は全体に硬質に焼き上がり、須恵質を含む。属性は円筒埴輪に共通し、95・99・101がA類、97・100・102がC類、98・103・106がD類、96がE類にそれぞれ区分される。A類は須恵質が多く、E類は指ナデによる凸帯下沈線が認められ、ハケメも粗い。

へう記号は、透孔の右脇に描かれた銀杏葉文をへう記号A(G類)、透孔の周囲に描かれた円文をへう記号B(L類)、最上段外面に描かれた縦条線をへう記号C(B3類)、内面に描かれた斜条線をへう記号D(K類)、その他を一括してへう記号Eに分類した。このうちへう記号Eは、120・121のように透孔と交差する斜線状のものと、122のような弧線がある。

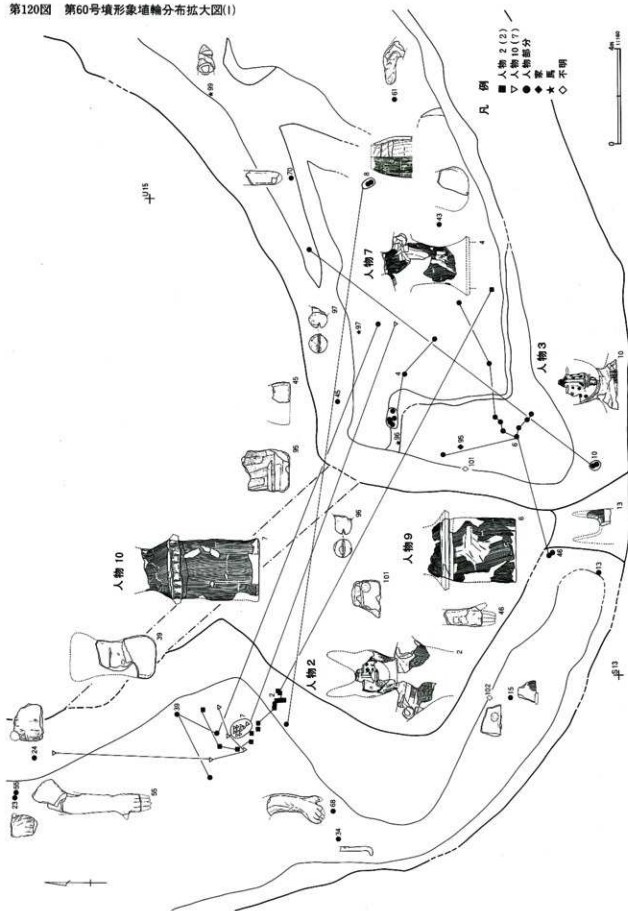
第119図 第60号墳形象埴輪分布全体図



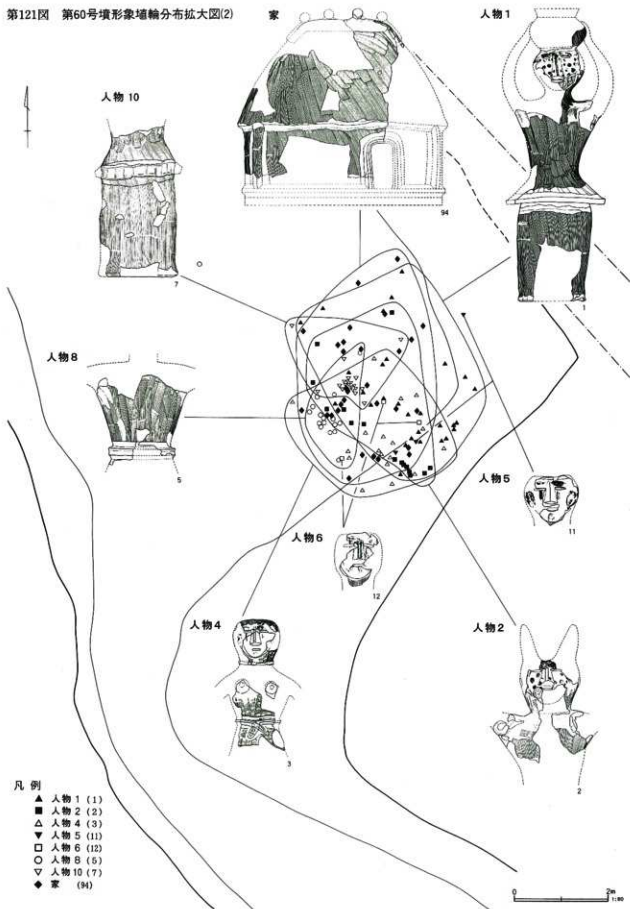
ヘラ記号の分布状況について検討すると、ヘラ記号Aは後円部東側からの出土が希薄で、括れ部西側に集中したあり方を示している。とりわけ前方部前面の周溝外側から転落した状況で86が出土しており注目される。ヘラ記号Bは小破片が多いことから第61号墳からの混入の可能性が高く、それを裏づけるように第61号墳に近接した部分から大半が出土している。ヘラ記号Cは、後円部東側の周溝外側寄りの3箇所にまとまっており、限定された場所に樹立されていたことを示唆している。ヘラ記号Dは周溝全体に広く分布しており、内面のヘラ記号として外面のヘラ記号とは異なった性格を有するものと思われる。

形象埴輪は括れ部を中心に、破片総数356点が出土した。とりわけ西側括れ部のT12-14・15グリッドを中心とする5m四方ほどの狭い範囲からまとめて検出され、集中区を形成していた。この範囲からは寄棟造の家形埴輪と人物埴輪がまとめて出土した。人物の個体数は形態の窺えるものが10体ほど出土しているほか、顔の破片や腕部の破片等を勘案すると、少なくとも見積もっても15体以上の人物埴輪が西側括れ部から前方部にかけて樹立されていたものと想定される。人物埴輪には壺を運ぶ男子、二又の被り物をつけた男子、弾琴像、鏡を腰に下げた女子等が確認されており、多彩な人物群が樹立されていたようである。

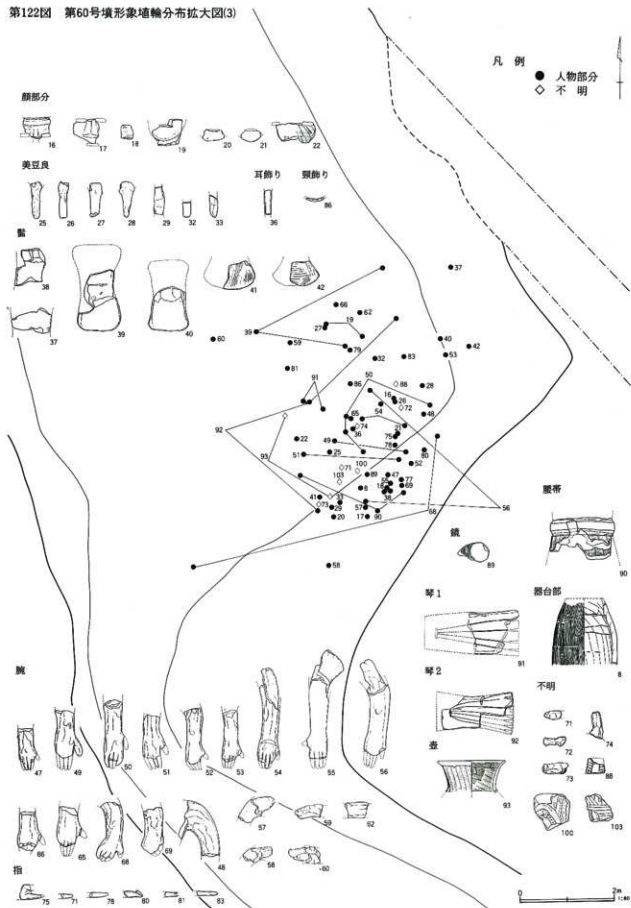
第120图 第60号墳形象埴輪分布拡大図(1)



第121图 第60号墳形象埴輪分布拡大図(2)



第122图 第60号墳形象地輪分布拡大図(3)





形象埴輪集中区以外では、後円部南東側から馬形埴輪の尻尾が単独で出土している。当初の樹立位置は明確でないが人物埴輪とはやや離れた位置に樹立されていたものと考えられる。次に、個々の形象埴輪について説明する。

人物1(第123図1)は、頭上に壺を乗せた人物である。腕を欠損しており、図示したように壺に手を添えていたかは不明であるが、腕基部の形状は上方を向く。顔面は眉から鼻稜にかけて丁字形に赤彩を施し、両頬に斑点状の円文を赤彩する。顔の円文彩色は、人物2の男子像と共通していることから本例も男子像の可能性が強い。復元高62cm。人物2(第124図2)は、二又の被り物をつけていたと推定される男子像である。顔面は顔の輪郭と斑点状の円文を赤彩する。人物3(第126図10)は、顔面に円文を中心とした赤彩を施した人物である。赤彩の状況から男子像と推定される。人物4(第124図3)は腰に鏡を下げた女子像である。頭部と胴部の接点はなかったが、胎土、焼成、色調等の比較から同一個体と判断した。顔面には赤彩を施し、乳房を表現する。人物5(第126図11)は、顔面に人物4と共通した赤彩を施した女子である。人物6(第126図12)は顔面に赤彩を施した女子である。赤彩の様子は若干異なるが、女子に共通した目の下の垂線がみられる。人物7(第124図4)は、頭部と腕部を欠損した胴部の破片である。腕を前方に差し出していたものと思われる。人物8(第125図5)は、胴部から腰部部分までの破片である。外面には赤彩が施される。人物9(第125図6)は半身像の裾部から器台部にかけての破片である。人物10(第125図7)は半身像の裾部から器台部の破片で、器台部の長さは人物9に比べ長い。

8は半身像の器台部と思われるもので、外面に裾部を貼付していたのであろう。9は形象埴輪の器台部の破片である。

第126図13・14は二又の被り物をつけた人物の破片。16は筒抜けの頭部を表現した人物の破片。17~22は顔面部分の小破片である。円筒状に作った頭部に顎や鼻の部分の破片を貼付して顔面を造作している様子が窺える。

23・24は外面に斑点状の赤彩を施した破片で円孔がある。おそらく人物の頭部の破片であろう。

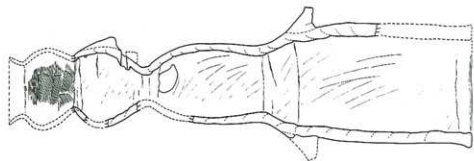
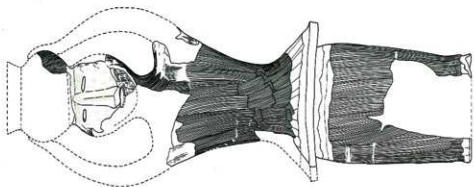
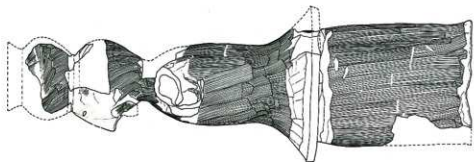
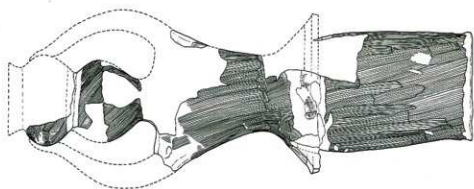
25~33は男子の下げ美豆良である。粘土塊を棒状に成形したもので、赤彩を一部残す。26のように下端面に木目圧痕を残す平坦なものや、28のように丸くおさめるものなど差異が認められる。34~36は粘土紐の両端をL字形に短く折り曲げ、その一端を耳孔部分に差し込んで、垂飾状の耳飾りを表現した付属品と推定される。第126図37~第127図45は女子の島田髷の破片である。いずれも粘土板成形であるが、一枚作りのもの(40)と、前後を別々の粘土板で成形して微妙な膨らみを表現した(39)のものがある。また形態的には撥形のもの(39・40・44・45)と分銅形(41・42・43)に区分される。

第127図46~第128図70は腕の破片である。いずれも中実成形で、指は粘土紐を束ねて表現し、腕の付け根は胴部に接合するためのホヅを作り出す。70は指の表現を欠き、手先を板押圧により作り出しており、後出的な技法であることから混入と思われる。71~74は手捏ねの粘土塊で器種は不明である。

75~83は指の破片である。粘土紐を束ねて指をリアルに表現している。84は拇指あるは髷の元結の破片と考えられる。85は外面に赤彩を残し、拇指の可能性がある。86は頭飾の破片であろう。87は頭飾につけられた勾玉と思われる。88は台形状を呈する板状の付属品で、外面に線刻によって文様を描き、赤彩を施す。

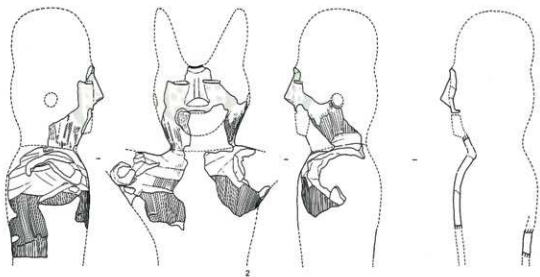
89は女子埴輪の腰部に下げた鏡で、赤彩を施す。90は凸帯で腰帯を表現した人物の破片である。91~92は弾琴像のもつ琴の破片である。琴1(91)は厚さ1cmほどの板状で、共鳴槽を表現し、四絃を太い線刻で表現する。絃は突起の間に掛けられているが、絃孔部分を欠損する。琴2(92)は厚さ1.5cmの板状で、共鳴槽をもつ。六絃を細線刻で表現し、絃は突起の間に掛けられ、絃孔は細長く、わずかに貫通する。93は小型の壺形埴輪の破片と考えられる。内外面の調整は目の細かいハケメで仕上げ、赤彩を施す。

第129図94は寄棟造の家形埴輪である。図上復元で

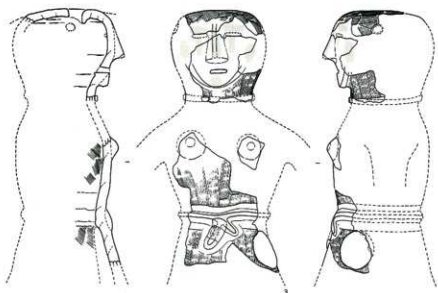


人物 1

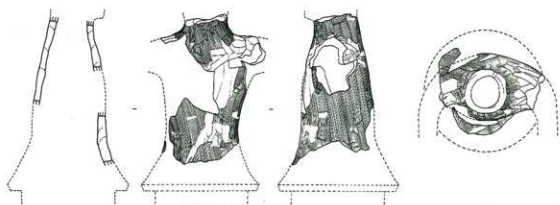




人物 2

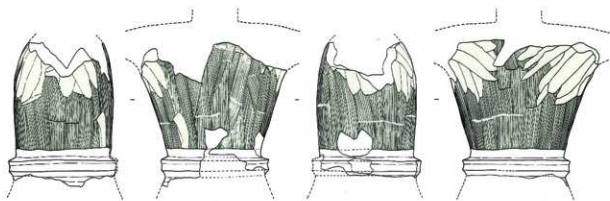


人物 4



人物 7

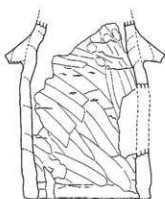




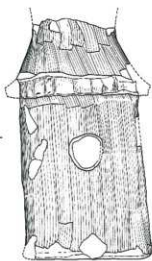
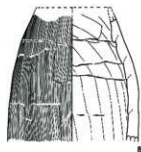
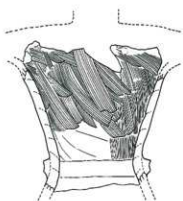
人物 8



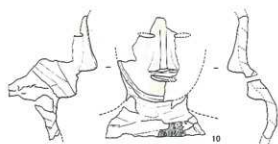
人物 9



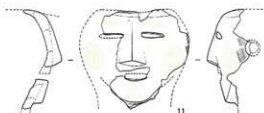
人物 10



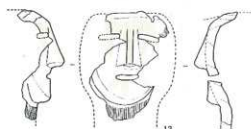
0 10cm  
113



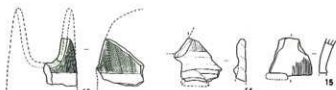
人物 3



人物 5



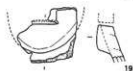
人物 6



13

14

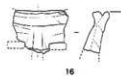
15



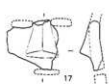
19



20



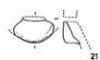
16



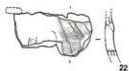
17



18



21



22



23



24



25



26



27



28



29



31



33



35



30



32



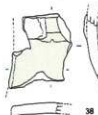
34



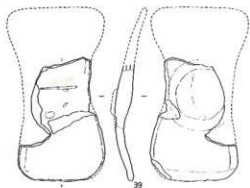
36



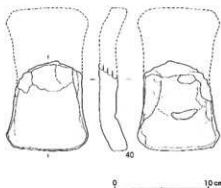
37



38



39



40



第127图 第60号墳形象埴輪(5)

